

矢田部良吉年譜稿

太田由佳¹・有賀暢迪²

¹国立科学博物館理工学研究部協力研究員

²国立科学博物館理工学研究部研究員
〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

A Chronological Sketch of the Life of Ryokichi Yatabe

Yuka OHTA and Nobumichi ARIGA*

Department of Science and Engineering, National Museum of Nature and Science,
4-1-1 Amakubo, Tsukuba, Ibaraki 305-0005, Japan

*e-mail: n-ariga@kahaku.go.jp

Abstract Ryokichi Yatabe (1851–1899) was an English scholar, botanist, and educator in Japan, who was active from the closing days of the Tokugawa regime to the Meiji period. Being Japan's first professor of botany at the University of Tokyo, he is famous for introducing Western botany to this country. The National Museum of Nature and Science, Japan, holds his archival materials, which include his diaries, notebooks, and manuscripts. This article provides a biographical sketch of Yatabe's life based on a survey of these materials as well as other primary sources. It shows plainly that Yatabe was very active not only in botany or his primary profession but also in new-style poetry, the improvement of the Japanese language, girls' education, English teaching, and music education. In addition, the authors found that in the course of his life, Yatabe sometimes made a remarkable, even extreme, turn from one field to another. Our chronological sketch will be the starting point for further studies that conduct detailed analyses of Yatabe's activities in each field, considering his studies and thoughts in historical contexts.

Key words: Ryokichi Yatabe; history of botany; higher education in the Meiji period; College of Science, Tokyo University

はじめに

矢田部良吉（やたべ・りょうきち、1851–1899）は、幕末から明治にかけて活躍した英学者・植物学者・教育者である。開成学校教授試補に始まり、アメリカへの官費留学を経て、教育博物館館長、東京大学理学部教授、東京高等女学校校長、東京盲啞学校校長、高等師範学校校長などを歴任した。科学史の上では東京大学の初代植物学教授として欧米流の植物学を導入したことで知られ、また、文学史における新体詩運動の旗手の一人としても記憶されている。

このように、幕末から明治にかけての洋学史・科学史・高等教育史等の重要人物でありながら、

矢田部の学問・研究や思想の詳細は従来それほど知られていない。その生涯についても、博物学史や文学史の立場からある程度詳しい伝記的記事が書かれているが^{1),2)}、科学史や洋学史の立場から史料批判を行って著された伝記の類は存在しない。本稿は、矢田部の伝記的事項を一次史料に基づいて整理し、今後の歴史研究の基礎資料とすることを目的としたものである。

本稿で用いた一次史料のうち最も重要なものは、国立科学博物館が所蔵する矢田部良吉資料（以下「矢田部資料」）である。これは1975（昭和50）年に親族から寄贈されたもので、その概要目録は中川らによって公表されているが³⁾、体系的な検討はこれまで行われていない。筆者らは今

回、この資料群を通覧し、そこから得られる知見と他の文献史料の記述とを一つの年譜にまとめることによって、矢田部の生涯と学問・研究活動の展開を概括しようと試みた。

本年譜では、矢田部の生涯を活動内容の変遷によって次のように分けた。

1. 修学時代……生まれてから、江戸と横浜で英学を学び、開成学校の助教になるまで。
2. 留学時代……森有礼に随って渡米し、コーネル大学で学位を取るまで。
3. 東京大学時代……帰国後、東京大学理学部教授として植物学を教えるも、非職となるまで。この時代はさらに、整備期、活動期、転換期、非職期、という4期に分けられる。
4. 高等師範時代……高等師範学校教授として英語を教え、不慮の事故により亡くなるまで。

各時期によって記述のもとになる史料の種類が異なるため、各節冒頭で、特に依拠した史料については簡単な説明を加えた。その他、全体に関わる留意事項は次の通りである。

凡 例

- 一、矢田部の年齢には満年齢を用いた。
- 一、年譜中の日付は、明治3年までは旧暦、それ以降は新暦である。
- 一、矢田部の事項は○、関連事項は□で示した。
- 一、矢田部の事項は、特に断らない限り、矢田部資料中にある自筆（後半は他筆）の「履歴書」に拠る。その資料情報は次の通り。

記号・番号 X-4. 仮綴じ1冊。明治28年4月4日の行から筆跡が変わり、同32年8月8日の卒去までを同筆で記す。矢田部没後に誰か親しい人が書き継いだものであろう。冒頭の署名の肩書から、起筆は明治21年10月頃と推定される。

なお矢田部の履歴書としては、本資料と別に、『日本近代文学研究叢書 第4巻』（1956年）²⁾に転記されたもの（当時、東京教育大所蔵）が存在する。これも死去後の事項を含むが、どこまでが自筆であるかは不明である。両履歴書の内容はおおむね一致するが、重要な相

違がある場合にはその旨を注記する。

- 一、履歴書以外の矢田部資料を参照した場合は、資料記号・番号を I-1 のように示した（記号・番号は中川らの概要目録³⁾による）。矢田部資料以外の文献史料は、参考文献と共に本稿末尾に番号付きで列挙し、年譜中では文献番号と頁付けを [1] 1-2 のように示した（この例は、文献1)の1-2頁を指す）。
- 一、史料の引用に当たっては、旧字・異体字を通行の字体に改めた。他に、コト・トモ・トキの合字を開き、句読点を追加した場合がある。

1. 修学時代

1851～1870年（嘉永4～明治3）

矢田部は葦山代官・江川英龍（1801-1855、36代太郎左衛門、号坦庵）に仕えた父・卿雲の跡を襲うべく、江川家が主宰した学塾（江川塾）で初めて修学の途に就いた。学んだのは英語と数学で、そこで能力を認められた結果、さらに横浜へ遊学した。遊学を斡旋したのは、江川塾で矢田部を教えた大鳥圭介であった。この間は資料に乏しいため、多く大鳥の回想 [4] によりながら、その動向を確認する。

1851年（嘉永4） 0歳

○ 9月19日 伊豆国田方郡葦山に生まれる。

父は蘭学者矢田部卿雲（1819-1857）。母は沼津藩士原川氏満寿（ます） [2] 64。卿雲は、もと武蔵国勅使河原（埼玉県児玉郡上里町）の農家の出であるが、江戸へ出て学び、蘭学に通じたことによって江川英龍に採用された。訳書に『警備術原』『窮理実験陸用砲術全書』『撒羅満氏産論』がある。

1857年（安政4） 6歳

○ 7月10日 父・卿雲、没す。数え38才。

これ以前に、矢田部はすでに江戸へ出て芝新銭座の江川邸に寓居していたというが、父の死去を受け、母の実家である沼津の原川邸に身を寄せることとなった [4]。

1862年（文久2） 11歳

○ この年、沼津で詩稿を認める。

詩稿 V-1 の奥書から、この頃はまだ沼津にいたとわかる。

1864年（元治元） 13歳

○2月 江戸へ出て、江川邸に寓居。英語と数学を学ぶ。

教えたのは中浜万次郎、三宅秀、大鳥圭介らであった [4]。

○4月 この頃、詩稿を認める。

詩稿 [V-2] のうち「偶作」と題された次の一編に、矢田部少年の当時の志がよく表わされている。

勤勞英国学（英国学に勤勞し）
未作一分功（未だ一分の功も作さず）
雖爾蒼頭裡（爾（しか）りと雖も蒼頭の裡に）
願為天下雄（天下の雄と為らんと願う）

○11月 横浜語学所に遊学する。

江川塾に学んで間もなく、大鳥圭介に学才を認められた矢田部は、その勧めによって横浜に遊学した。語学所へは神奈川奉行付属の調役河野栄二郎官宅に寓居して通い、引き続き英語と数学とを学んだ。いま一般に「横浜語学所」といえば、栗本鋤雲らがフランス政府の協力を得て開いた仏語伝習所を指す場合が多い。しかし矢田部の学んだ「横浜語学所」は、「税関に属し神奈川奉行の管轄で、税関官吏通訳官などの語学および数学を教授するために設けられ」、「単語の音読、文字の連綴、作文、数学、代数幾何学」などの「英学」を教えたものという。教師はブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810-1880)、タムソン (David Thompson, 1835-1915)、バラ (James Hamilton Ballagh, 1832-1920) 等の宣教師であった [4]。

1867年（慶応3） 16歳

この年の初め頃まで矢田部は横浜語学所にいた [4]。語学所を出てから、開成学校に就くまでの動向は未詳。

1869年（明治2） 18歳

○5月6日 開成学校教授試補に任じられる。

開成学校は、幕府の洋学研究・教育機関である開成所を明治政府が接收し、名称を改めて明治元年に再開したもの。このときの矢田部の職務内容は定かでない。

○7月28日 大学校少助教に任じられる。

7月8日に、昌平学校・開成学校・医学校を統合して「大学校」が設立されたことによる任官である。

□12月17日 大学校が「大学」と改称される。

それまで「本校」である旧昌平学校に対して「分局」とされていた旧開成学校および旧医学校が、それぞれ「大学南校」「大学東校」と改称された。

1870年（明治3） 19歳

○7月29日 大学校中助教に任じられる。

履歴書には「大学校」とするが、正式には「大学南校」であろう。

この頃の矢田部は、小島憲之（建築家、後に矢田部と同じくコーネル大学へ留学）ら大学校の書生を「塾生」として家に住ませ、同校に出入りしていた高橋是清とも親しく交際していた [5]。

2. 留学時代**1870~1876年（明治3~9）**

1870年から76年にかけて、矢田部は米国に滞在し、コーネル大学で学業を修める。後の活動の基礎、特に植物学者としての素養はこの時期に培われた。

この時期のコーネル大学については、大学が年度ごとに発行する『便覧』（Register）が基本的な情報源となる。ただし、今回参照することのできた国立国会図書館所蔵の合冊本には、矢田部が在学していた4年間のうちでは2年次（1873-74）と4年次（1875-76）の版のみが含まれている [6]。また、もう1点の資料には、矢田部の入学する2年前（1870-71）の版などがある [7]。本節でのコーネル大学に関する記述は、特に断らない限り、この2点の史料に基づく。

1870年（明治3） 19歳（続き）

□閏10月5日 森有礼、少弁務使に任じられ、駐米公使として赴任を命じられる [8]。

○同月10日 中助教を免官となる。

○同月14日 外務省より文書大札使に任じられ、森に随行しての米国行を命じられる。

14日の森の日記には、「蕪山県配下矢田部良吉大学南校中助教ヲ被免、更ニ外務文書大札使ニ任シ、予ニ差添米行ノ命アリ」とある [8] 38。かねてより洋行の望みを抱いていた矢田部を森に紹介したのは、かつて森の書生をしていたことのある高橋是清であった [9] 上巻109-10。また、このとき一緒に渡米した外山正一は、「矢田部君は役人の名義は持って居ったがあちらへ行けば書生

になると云ふような約束で、森君が連れて行かれた」と伝える [10] 531].

○ 12月3日 横浜出航 [8].

○ 同月27日 サンフランシスコ到着 [8].

この到着日は、新暦の1871年2月16日に当たる。以降の日付はすべて新暦である（日本でも矢田部の渡米中、明治4年に改暦が行われた）。

1871年（明治4）20歳

○ 2月末、森一行、ワシントンに到着し、公使館の開設準備にかかる。

「矢田部洋行中諸留」[X-8](#)は、出航からこの頃までの覚書と見られる。

○ 4月 この頃、イサカに移り、受験勉強を始める。

矢田部は1ヶ月ほどワシントンの公使館にいた後、将来コーネル大学に入るつもりでイサカに行ったという [10] 531-2および11]。矢田部資料には、この年の年記のあるノートが3冊含まれ [IV-33, 38, 39](#)。うち1冊には「July 19. 1871 // At Mr. Kinnis, Ithaca, N.Y.」と記される。「Mr. Kinnis」は、同大学の『便覧』に広告が出ている入学予備校。これらのノートから、代数、英作文、ラテン語などを学んだことがわかる。

また、本年のある時点で、ニューヨークの写真館で外山と共に肖像写真を撮った [12] 54, 56].

○ この頃 コーネル大学のラッセルと知り合う。

ラッセル (William Channing Russell, ?-1896) は歴史学と南欧語の専門家で、この年からコーネル大学の副学長を務めた [13] 144]. 1873年7月付の紹介状 [VII-6](#) に、矢田部とは個人的に2年以上の付き合いがあると記す。

○ 8月 外務権少録に任じられる。

詳細不明。この時期の矢田部が実際に外務省の仕事を行っていたかどうかは定かでない。

1872年（明治5）21歳

○ 9月10日 コーネル大学の入学試験に合格したことを受け、外務省職を辞して公費留学生になることを日本少弁務使より承認される。

これより前、森は中弁務使（4月）および代理公使（5月）に昇任していたが、ここでの「日本少弁務使」は森を指すように思われる。

□ 9月～12月 第1学年、秋学期。

当時のコーネル大学は3学期制で、1学年は秋学期（9-12月）、冬学期（1-3月）、春学期（4-6月）から構成された。

在学中に発行された『便覧』では、矢田部は「科学課程」(Course in Science) の2年次および4年次の学生として登録されている。そこで『便覧』各版を参考に、矢田部が受講したと考えられる4年間のカリキュラムを表1にまとめた（1年次と3年次は前後の年度の版からの推定）。この「科学課程」は「一般課程」(General Course) の一つであり、専門家養成課程というより今日の一般教養課程に近いものであった。

矢田部が最初に学んだ自然科学関連の科目は人体の生理学で、これには受講ノート [IV-28](#) がある。ほかに、初年時のものと思われるフランス語の学習ノート [IV-42](#) も残されている。学期の始まる9月には、英仏-仏英発音辞書を購入した（国立科学博物館新収資料）。

1873年（明治6）22歳

□ 1月～3月 第1学年、冬学期。

この学期に学んだ動物学が最初の自然史科目であった。ノート [IV-30](#) の前半がその内容。

□ 4月～6月 第1学年、春学期。

受講ノートとして、古代史 [IV-29](#) と修辞学 [IV-30](#)（ノート後半）が伝わる。

○ 7月 紹介状を携え、東海岸を訪れる。

7月3日付でラッセルが紹介状を書き、矢田部に持たせている [VII-6](#)。これには宛名がないが、“He [Mr. R. Yatabe] now visits the Eastern states for the purpose of seeing their institutions of learning” という文言が見えることから、夏季休暇中に東海岸の教育・研究機関を見学して回ったと推測される。

□ 9月～12月 第2学年、秋学期。

カリキュラム表に従えば、本年度から次年度にかけてドイツ語を学んだ。ただし松村任三は矢田部の語学について、フランス語とラテン語に熟達していたと述べた上で、「其晩年ニ至リテハ又独逸書ヲ繕ケリ」と伝える [14] 4]. 現に矢田部は後年、必要に迫られてドイツ語を学び直している（1884年3月を参照）。

○ 12月 文部省より海外留学を許可される。

正式な留学許可である。森有礼がこの年の7月に帰国しているから、その働きかけによるものか。

1874年（明治7）23歳

□ 1月～3月 第2年次、冬学期。

カリキュラム表では、この学期に解析幾何か化学実験を選択する科目がある。矢田部資料中にあ

表1. 矢田部がコーネル大学で受講したと考えられる一般科学課程のカリキュラム

西暦 学年 学期	1872		1873		1874		1875		1876		
	Fall	Winter	Spring	Fall	Winter	Spring	Fall	Winter	Spring	Fourth Winter	
授業 科目	Algebra completed	Geometry	Geometry	Trigonometry	Analytical geometry	Calculus or Chemistry					
	French	French	French	French	French	French					
				German	German	German	German	German			
	Physiology	Zoology				Botany	Astronomy		Geology		
				Chemistry	Chemistry		Physics	Physics			
							Psychology	Moral philosophy	Logic	History of philosophy	Moral philosophy
								Roman history	History of Roman Empire	Medieval history	History
			Ancient history				Essays	Essays	Essays	General literature and oratory	General literature and oratory
			Rhetoric and composition	Rhetoric and elocution	Rhetoric and elocution	Rhetoric and elocution	Rhetoric and elocution			General literature and oratory	Critical analysis of orations with extempore speaking
										Specialty	Specialty

Lectures of non-resident professors
Preparations for Commencement

※同系統の科目が横に並ぶように配置を調整し、各科目のマスの高さが授業時間数に比例するようにした。

る立体解析幾何のノート [IV-27] がおそらく今期のものである。

矢田部は横浜時代、「最も数学に長じて居た」(大鳥)と評されており [4]、留学中には「最も植物及び数学に尽力」したと伝えられる [齋田による墓誌, 1903年8月を参照]。この次の学期の選択科目(微積分または化学)でも数学を選択したと予想されるが、これについては判断材料が残されていない。

□ 4月～6月 第2年次, 春学期。

この学期に初めて“Botany”(植物学)の授業を受けたと見られる。この年度の『便覧』には、この学期の試験問題として“Physiological Botany”(生理学的植物学)が掲載されており、その出題内容が植物の形態・生理・分類に及んでいることから、当該の授業では植物学全体を広く学んだと考えられる。

□ 9月～12月 第3年次, 秋学期。

本年度には物理学を学んでおり、受講ノート [IV-32] が伝わる。『便覧』にある試験問題等の記述から、物理学の授業は力学、電磁気学、音響学・光学をそれぞれ1学期で扱っていたことが知られ、本学期の授業は力学と考えられる。

1875年(明治8) 24歳

□ 1月～3月 第3年次, 冬学期。

物理学の受講ノート [IV-32] から、電磁気学を熱心に学んでいた様子が窺える。

□ 4月～6月 第3年次, 春学期。

引き続き、物理学のうち音響学・光学を学んだ [IV-32]。また、カリキュラム表の上では、この学期に初めて地質学を学んでいるはずである。

□ 9月～12月 第4年次, 秋学期。

第4年次では、科学課程の共通科目に加え、「専門」(Specialty)として特定分野を修学する。矢田部はここで植物学を選んだと考えるべきであろう。渡米時代のものと思われる植物学関係のノートには、いずれも年月日の記載を欠くが、植物生理学に関するもの [IV-31] (田中・鈴木による分析 [15])がある。隠花植物に関するもの [IV-37]、植物分類学に関するもの [IV-41]がある。

また、この年度にコーネル大学に入った小島憲之は後年、「[矢田部]博士は其大学では進化論などは群書を抄りて大に勉強して居たので試験の時教授に向つて平生教へられた通り答ふべきか教へられた範囲外のことを書いてもよいかと尋ねられ

たことがあるようだ」と回想する [6]。

1876年(明治9) 25歳

○ 1月～3月 第4年次, 冬学期。

ノート [IV-40] は四つの部分に分かれており、2番目の部分には“Winter Term, 1876”とあって、“General literature and oratory”(一般文学および雄弁術)のノートと見られる。これに先立つ1番目の部分には年記がないが、内容から、一つ前の学期に開講された同名科目と見られる。

□ 4月～6月 第4年次, 春学期。

ノート [IV-40] の3番目の部分は“Spring Term, 1876”とあり、やはり文学に関連した内容。4番目の部分は、表題や年記を欠くが、農業に関する内容と見られる。

なおカリキュラム表では、この学期に学外の講師による特別講義があると書かれているが、詳細は明らかにならない。

□ 6月15日 コーネル大学卒業。理学士号 (Bachelor of Science) を得る。

『便覧』に記された第7回学位授与式の次第に、“21. *THESIS IN BOTANY: The Marine Algae of the Atlantic Coast, Riokichi Yatabe, Japan”とある (*は“Not read”の印)。コーネル大学にはこの卒業論文が現在も保管されており、それには表題が“The general character of the marine algae of New England”と書かれている [16]。ここから、矢田部の卒業論文のテーマは東海岸北東部の海藻であったことが知られる。

また、矢田部は卒業祝賀会 (class day) に際して作文に秀でた者として“Essayist”に選ばれ、“A Survey of the Modern Progress in Knowledge”と題する論説 [VII-4] を発表した [6]。この原稿は『英語青年』誌の矢田部十周忌記念号に掲載されたほか、中川による紹介もある [17]。

アメリカにおける植物学の修学

矢田部から指導を受けた宮部金吾は、矢田部在学中の植物学教授はシダの専門家イートン (Daniel Cady Eaton, 1834–1895) で、矢田部は彼に学んだとしているが [18] 97, 100]、これは誤りである (イートンはイェール大学の教授であった [19])。コーネル大学の植物学担当教授はプレントイス (Albert Nelson Prentiss, 1836–1896) で、この人物の追悼文中には学生の一人として矢田部の名前も挙がっている [20]。ただし、矢田部が何らかの

形でイートンの指導を受けた可能性も否定できない。矢田部の卒業研究で扱われている海藻について、プレントイスにはその方面の調査・研究を行った形跡がないのに対し、イートンは1873年に東海岸で海藻の採集調査を行っているからである[21]。

さらにこれと関連して、宮部は2箇所で次のようにも述べている。

なほ〔矢田部教授が〕卒業する前、帰朝の上は大学に於ける植物学の講義を担当するやう政府の通達があつたのでその夏ハーバード大学に於ける夏季学校の植物学の課程をとられた。この時の担任教官はファロー教授〔William Gilson Farlow, 1844-1919〕で、場所はウッズホール（Woods Hole）にあるワシントンの水産局の臨海研究所であつたとのことである。従つて海藻が主となつたらしい。なほ夏季学校は一部はケンブリッジでも開かれて有名なエーサ・グレー教授〔Asa Gray, 1810-1888〕が講義をされたやうである〔18〕101。

矢田部先生は〔……〕明治九年帰朝に先立ちハーバート大学が開催した夏期大学に入り植物学を修められた。此夏期大学には海藻並びに菌学の大家Dr. W. G. Farlow教授が講師となり、マサチューセット州ウッズホールの臨海実験所に於て専ら海藻の実験を指導された〔22〕2。

これらの証言を裏付ける史料は確認されておらず、詳細は今後の研究に俟たねばならないが、ここに出てくるサマースクールについて2点だけ注意を加えておく。第一に、これは有名なウッズホール臨海実験所の設立（1888年）よりも10年以上前である。第二に、宮部はこれを帰国直前（1876年）の夏としているが、そうだとすれば、海藻をテーマとした卒業論文はその前に書かれていたことになる。このことと、矢田部が同年8月に帰国したこと（次節）を考え合わせると、サマースクールへの参加は前年（1875年）であった可能性がある。

3. 東京大学時代

1876～1894年（明治9～27）

3-1 整備期 明治9年～

帰国した矢田部は東京大学理学部の植物学教授となり、日本国内での植物学研究の立ち上げに力を注いだ。とりわけ初期に熱心に行ったのが、全国各地を訪れての植物採集である。矢田部に拾われる形で植物園に奉職し、後に2代目の植物学教授となった松村任三は、矢田部の出張は都合数十回、計16県に及び、加えて毎週日曜日には東京近郊で植物を採集したと伝えている〔15〕2。

東大を拠点とする矢田部の活動については、大学が編んでいた各年度の『年報』が基本史料となるほか、『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』にまとまった情報が載る〔23〕。また、この時期の矢田部はお雇い外国人の動物学教授モース（Edward Sylvester Morse, 1838-1925）と行動を共にする機会が多く、したがって本節の記述は磯野のモース伝によるところが大きい〔24〕。同様に、長久保による松村伝（特に巻末の略年譜）には採集旅行の記述が多く見出せるが〔25〕、出典が必ずしも明確でない上、ほかの史料中に見出せない事柄も含まれており、やや注意を要する。

1876年（明治9） 25歳（続き）

○8月 帰国。

『日本近代文学研究叢書 第4巻』に転記された履歴書には同月帰国とある（矢田部資料中の履歴書[X-5]には記載なし）。帰国の際、矢田部はファローから海藻標本を贈られ〔22〕2、またグレーから北海道産植物の標本（開拓使より検定のため送られていたもの）を託された〔18〕98。

○9月13日 東京開成学校五等教授に任じられる。

先に帰国して同校に勤めていた外山正一によれば、矢田部は帰朝後、まず森有礼を尋ねて「身分の事などを相談せられた」が、それについては外山に相談してみると言われて自分のところに来た。そこで、濱尾新（後述）に話をし、濱尾が賛成して、矢田部が来ることになったという〔10〕。この証言は、「帰朝の上は大学に於ける植物学の講義を担当するやう政府の通達があつた」とする宮部金吾の言〔18〕と食い違うが、いずれが正しいかは明らかでない。

また矢田部の任用について、東大の『年報』は「十二月九日静岡人矢田部良吉ニ五等教授ノ任ヲ

嘱セラレ博物学ヲ教導セシム」と記し [26] 10], 履歴書と日付が相違する。9月の時点では、濱尾は東京開成学校の校長補であり、校長の畠山義成は渡米中であった。翌10月、畠山は帰国途上で客死しているため [27] 105], 正式な決裁は12月に濱尾が行った可能性が考えられる。

当時の矢田部の職務については不詳であるが、岡村金太郎は、「此頃生理学を教へた外国教師にマカター (McArty?) と云ふ人があつて、矢田部先生は開成学校で此人の助手のやうなことをしたこともある様な話である」と伝えている [28] 77]。「マカター」はマッカーティー (Divie Bethune McCartee, 1820-1900) のことであろう。この人物は宣教師であつたが、請われて1872年9月から教鞭を取っていた。教授科目には自然史が含まれ、また小石川植物園の整備にも携わっている [29] 185および30] 48]。さらに岡村は、「矢田部先生は、初めは予備門で、地文学を教へて居た相だ」とも証言している [28] 78]。矢田部資料に「地質学略説」と題する訳稿 VI-4 があるのは、これと関連している可能性がある。

○ 9月21日 初めてホイットニー家を訪れる。

ホイットニー (William Cogswell Whitney, 1825-1882) は、森有礼の求めに応じて1875年来日し、当時、商法講習所で教えていたお雇い外国人 [31] 433-4]。後に勝海舟の三男と結婚する長女クララが日記を残しており、矢田部もある時期頻繁にそれに登場する。クララによれば、矢田部は無神論者であつたという [32] 上巻242]。

○ 11月9日 東京博物館植物園兼務を命じられる。

当時、小石川植物園は東京博物館に属しており、第一義的には「植物学ニ従事スル者ノ実地研究ヲ要スルカ為メ設クル所」とされていた (明治8年4月制定の規則第一條) [30] 48]。

○ 12月9日 東京博物館長に任じられる。

「東京博物館」は、明治8年2月に太政官正院の博覧会事務局から文部省所管に戻る形で設立された文部省博物館が、同年4月に名称を改めたもの。先述の畠山義成が開成学校長と兼任で館長を務めていた。矢田部は10月に逝去した畠山の後任ということになるが、就任の経緯は『国立科学博物館百年史』に記されていない [30] 34]。

1877年 (明治10) 26歳

○ 1月初旬 江の島で海藻を採集する。

1月1日、矢田部はホイットニー家を訪ね、今週

江の島に行くという話をした。8日には土産を持って再びホイットニー家を訪ねている [32] 上巻301, 305]。松村任三による略伝中に「帰朝ノ翌年江ノ島ニ海藻ヲ採集シ」とあるのは [15]、この時のことと思われる。ただし宮部金吾は、「明治九年第一の採集旅行は江の島で行はれ、しかも海藻がその目的物であつた」と書いており [22]、前年のうちに海藻採集を行っていた可能性も否定しきれない (なお以上については、北山による紹介 [33]) を参考にした)。

○ 1月11日 コーネル大学のワイルダーに、自然史標本の交換を申し入れる。

ワイルダー (Burt Green Wilder, 1841-1925) は矢田部の在学当時からの動物学教授。東京博物館長の肩書で書かれた同日付の書簡が、コーネル大学の所蔵文書中にある [34]。前年12月にもアメリカの別の動物学者を相手に、貝類標本の交換・送付を仲介した [30] 34]。

□ 1月26日 東京博物館、「教育博物館」と改称する。

この頃から、博物館は学術よりも教育を重視するようになった [30] 62-3]。

○ 3月28日 この頃、東京開成学校の会合で話をする。

この日のクララの日記に、同校で開かれたある会合において、矢田部と「藤沢氏」が「外国人と外国人の道徳と宗教について、とても憎らしい話をしたらしい」と記される [32] 上巻338]。これをきっかけに、矢田部は宣教師らに敵意を持たれたとのことであるが、詳細は不明。

○ 4月14日 東京大学理学部五等教授に任じられる。

○ 4月19日 東京大学植物園事務兼務を命じられる。

4月12日に東京開成学校と東京医学校が合併して東京大学となった。植物学研究を第一目的としていた小石川植物園はこの機会に、東京博物館から東京大学に移管された [30] 49]。なお、矢田部が植物園事務担任を嘱された日付は、大学の『年報』では4月20日となっている [26] 42]。

□ 4月30日 マッカーティー、東京大学を解任となる [26] 12]。

これ以降、矢田部が東京大学における植物学の中心人物となる。

□ 5月9日 伊藤圭介、東京大学植物園における植物取調を嘱託される [35] 448]。

□5月17日 松村任三，東京大学植物園に雇として就職する [25] 43].

もともと法学部の学生だった松村は，学業を一時断念して静養中であった。矢田部に初めて会ったのは4月頃という [15]。]

□6月17日 モース，来日する [24] 68].

研究のため3ヶ月間だけ滞在する予定だったが，来日直後に東京大学の動物学教授になることを要請され，これを受諾した。

モースはまた，同月24日に，開館準備中の教育博物館（後述）を訪れたが，これは矢田部の紹介によると見られる [24] 75].

○7月17日 モースと江の島に行く。

モースが実験施設として使う小屋を借りるためであった [24] 87].

○7月下旬 日光で植物採集を行う。

標本を集めただけでなく，草木果樹60種を植物園に移植 [26] 42]. 松村任三によれば，この日光行きが東京大学理学部における植物蒐集の端緒であった [15]。なお，文献には7月とのみあるが，以下の理由から同月下旬と考えたい。すなわち，7月21日から8月末までに及んだモースの江の島滞在のあいだ，松村は現地でもモースの助手をしていた。そしてその間の松村の日記に，矢田部は一度も登場しない [36] および [24] 91-97]. 他方，松村は矢田部の略伝中で，「余ガ君ト其行を共ニセル重ナル地名を挙グレバ，明治十一年四月ニ於ケル武州ノ秩父，三峯，武甲ノ三山ヲ始メトシ」と書き，日光に同行したとは述べていない [24]。それゆえ，モースと松村が江の島にあるあいだに，矢田部は日光へ行ったと推測される。

□8月18日 教育博物館の開館式が行われる。

教育博物館はこの年，湯島から上野に移転し，第一回国内勸業博覧会の開催にあわせて開館した [30] 64-66]. 矢田部も開館式に出ているはずである。

○8月27日 東京大学理学部教授に任じられる。

○8月30日 教育博物館長兼務を命じられる。

ここで改めて教育博物館長の辞令が出されている理由は明らかでない。

□9月 明治10年度の授業が始まる。

当時の東京大学理学部には生物学科を始めとする五つの学科が置かれ，1年次は学部共通の授業が行われた。生物学科としての授業は2年次からで，最後の4年次は植物学と動物学のいずれかを専攻することになっていた。実際の授業は，年度

の始まりである当月から始まり，最初の生物学科の生徒（当時は「生徒」が正式名称）は松浦佐用彦と佐々木忠次郎（または忠二郎）の2名であった（いずれも2年次）。矢田部はこの両名を相手に植物学の授業を行ったと見られる [23] 20-21, 38-39].

□9月8日 伊藤圭介，東京大学理学部員外教授に任じられる。

続く10日，従前通りの植物園における植物取調べを命じられる。また20日には，月に二，三度の教育博物館出勤も命じられた [35] 437].

○10月9日 モースによる，大森貝塚の3回目の発掘に同行する [24] 118].

これが最初の本格的な発掘であった。出土品の一部は教育博物館でも展示された [30] 107-8].

□10月10日 伊藤圭介，『小石川植物園草木目録』前編（双子葉之部）の凡例を記す。

同書は本年，東京大学理学部より刊行された。後編（単子葉之部）が明治13年に，さらに後編の改版が明治14年に刊行された。

□11月5日 モース，一時帰国の途に就く [24] 151].

不在中は矢田部が代わりに予備門の生徒を教えた。モースは翌年4月に再び来日する。

○12月26日 江の島へ実地指導および採集に行く。

12月22日から16日間の日程で，生徒2人が実地研修のため江の島に派遣された。矢田部は26日に起き，指導する傍ら動植物標本を収集した [37] 24-25]. 指導を受けたのは前出の松浦佐用彦・佐々木忠次郎であろう。なお，『松村任三の生涯』では「江ノ島，熱海海辺に植物採集」と書かれており，熱海まで足を延ばしたことになっている [25] 218].

1878年（明治11） 27歳

○2月末 金沢良斎の娘，録（録子）と結婚。

金沢良斎は岐阜県出身の陸軍医 [38] 176]. 面識のあったクララによれば，録はこの時点ですでに10年以上も英語を学んでおり，洗礼を受けたばかりであった [32] 上巻471-2].

○4月 秩父・三峰・武高三山で植物採集を行う。松村任三が助手として初めて随行する [15]。]

『松村任三の生涯』では，「武州三峯山，武甲山，上州妙義山等に採集」となっている [25] 218]. 秩父では約200種の標本を得た [39] 35].

○ 4月～6月 植物園などで採集を行う。

この時期の日付が入った記録帖 [IV-22] が伝わる。また、年記のみで日付を欠くが、専用のフォームに植物標本を記述しているノートも3冊ある [IV-3～5]。

○ 7月13日 北海道へ採集に赴く。

モースの計画した標本採集旅行に同行したもので、動物学助教授の高嶺秀夫や生物学科3年生の佐々木忠次郎らも参加した。この日に横浜を出航して函館に向かい、帰りは青森から陸路で東京に戻った。帰着は8月27日。この時の日記 [V-3] に基づく旅程の記述が磯野のモース伝にある [24] 187-195]。北海道で集めた植物は約600種であった [39] 35]。

□ 9月 明治11年度の授業が始まる。

当年度の生徒は、生物学科3年生の佐々木忠次郎と、2年生の飯島魁・岩川友太郎の3名(松浦佐用彦は7月に急逝) [23] 40]。また、これと別に、地質学科2年生向けにも授業を行った [40] 34-6]。

なお、矢田部は本年度末の『年報』に、江の島で収集した海藻類が50種類以上に及んだと記すが、いつのことかは不明 [39] 35]。

○ 9月～10月 植物園などで採集を行う。

この時期の日付が入った記録帖 [IV-23] がある。

○ 10月20日 東京大学生物学会が設立され、会長に選出される [40] 23巻533]。

同年春に「博物友会」という会が学生を中心に作られており、また10月8日には矢田部らが会の創設を相談したと伝えられる。20日の第1回会合で矢田部を会長に推薦したのは、学会設立を主唱したモースであった [24] 197-8]。

○ 12月1日 東京大学生物学会で報告する。

内容は「海藻の胞子形成 (the fructification of the Algae)」について [40] 23巻534]。

○ 12月21日 和歌山へ採集に赴く。

大学の『年報』によれば、この日から20日間の予定で紀州に植物標本採集を行い、およそ150種を得た [39] 14および35]。これには松村任三と「植物学生徒一名」が帯同したとされるが、後者は佐々木忠次郎と見られる [24] 250]。翌年2月2日の東京大学生物学会で佐々木忠次郎が行った報告に、以前に矢田部と琵琶湖で採集したという標本が登場することから [40] 23巻725-6]、和歌山出張の前後に琵琶湖でも採集を行ったと推測される。

1879年(明治12) 28歳

○ 1月7日 教育博物館長を解任となる。

履歴書はこのように記すが、この日付の時点では、和歌山から戻っていなかったように思われる。また、この解任の記事は『国立科学博物館百年史』に見出せない。後任は箕作秋坪で、17日付で就任している [30] 75]。

○ 1月25日 文部省でのモースの講演を通訳する。

東京学士院の発足記念講演でモースが行った、「動物変進論」と題する3回の連続講演である(2回目は2月1日、3回目は同8日) [24] 215-6]。モースは前年10月から進化論をテーマにした一般向け講演を行っており、本年には東京大学でも連続講義を行った。

いくつかの文献で、矢田部はモースや外山正一と共に進化論を広めるのに貢献したと書かれている。だが外山によれば、そもそも進化論の紹介を日本で最初に行ったのは自分や矢田部であり、それから少ししてモースが来たのであるという [10] 537-8]。

○ 3月 小笠原へ採集に赴く [15]。

これには少なくとも佐々木忠次郎が同行した [24] 250]。翌4月6日の東京大学生物学会の記録には、矢田部と佐々木が小笠原より持ち帰った貝類コレクションにモースが注意を促したという記述がある [40] 24巻118-9]。

○ 3月～7月 東京近郊での植物採集を行う。

この時期の採集記録帖 [IV-24, 25] と、5月の日付の入ったノート [IV-44] が伝わる。

○ 3月21日 モースらと共に、西ヶ原林昌寺貝塚を発掘する [24] 249-50]。

○ 5月4日 東京大学生物学会で報告する。

内容は「小笠原諸島の植物相 (the flora of the Bonin Islands)」について [40] 24巻119-20]。

○ 6月8日 東京大学生物学会で報告する。

テーマは菌類。学生の佐々木忠次郎と共に、植物実験室で培養したものであった [40] 24巻194]。

○ 7月6日 東京大学生物学会で報告する。

内容は「葉上の出芽 (the production of buds upon leaves)」について。数週間前に飛鳥山で採集したシラヤマギク (Aster scaber) に、葉上から出芽するものがあった [40] 24巻194]。

○ 7月11日 慶応義塾でのモースの講演を通訳する [24] 216]。

○ 7月20～25日 華族会館でのモースの連続講演(全4回)を通訳する [24] 217]。

この2件はどちらも進化論についての講演。

○8月7日 会津へ採集に赴く。

17日間の予定で、松村任三と「生物学生徒一名」が随同行した [39] 15]. ここまでの経過に照らして、同行したのはまず間違いなく佐々木忠次郎であろう。なお『松村任三の生涯』には、「七月、矢田部に随行して、会津磐梯山、飯豊山等に採集」とある [25] 218]. 出典不明の情報であるが、少なくとも七月でなく八月の誤りと思われる。

□9月3日 モース、日本を離れる [24] 262].

入れ替わる形でホイットマン (Charles Otis Whitman, 1842-1910) が来日し、第2代の動物学教授となった。

□9月 明治12年度の授業が始まる。

4年次に進んだ佐々木忠次郎は植物学でなく動物学を専攻に選んだ。そのほかの生物学科の生徒としては、3年次に飯島魁と岩川友太郎がおり、2年次に石川千代松が入った。矢田部が担当したのは、2年生および3年生の植物学実験・講義と、地質学科2年生向けの植物学である [41] 49-51]. ただし、植物学専攻の4年生はいなかったものの、課程表の上では4年次に「植物学 (各類形質及高等生理・無花植物)」という科目が設定されていた [23] 22-3].

○12月 長女・ふみ (文) が生まれる [2] 102].

○12月 モース著・矢田部訳『大森介墟古物編』印行。

英語版は8月末ないし9月初め (おそらくモースの離日直前) に出版されていた。矢田部による日本語版は、表紙には12月とあるが、実際の発行は翌年1月と見られている [24] 124].

○12月 江の島へ採集に赴く？

『松村任三の生涯』に「十二月、矢田部に随行して江ノ島に採集」と出てくるが [15] 218], 典拠が明らかでなく、ほかにこれを裏付ける史料も見当たらない。

1880年 (明治13) 29歳

○2月～5月 各地で植物採集を行う。

この時期の採集記録帖 [IV-26] が伝わる。

○3月 この頃、花房義質に、朝鮮における動植物標本の採集を依頼する [42] 408-09].

花房は代理公使として朝鮮に駐在していた。

○3月26日 江の島へ採集に赴く。

期間は2週間で、同行したのは松村任三に加え、画工の木村静山と記録されている [41] 20].

○7月 長野へ採集に赴く。

期間は延べ3週間で [41] 95], 松村任三による矢田部の略伝には行先が「信州浅間山」とある [15]. 長久保の松村伝はこれより詳しく、「七月十四日、矢田部に随行して凡そ往復三週間、信州碓氷峠、浅間山、和田岬、下諏訪等に採集」と記す [25] 218]. 外山正一が後年、矢田部に同行して「共に浅間に登つたこともありますし、又は御嶽へ登つたこともありますし、又は駒ヶ嶽へ登つたこともあるのであります」と語っているのは [10], すべてこの時のことであろう。

□9月 明治13年度の授業が始まる。

4年生の飯島魁・岩川友太郎・佐々木忠次郎 (留年) は全員が動物学を専攻。矢田部は3年生の石川千代松と2年生の熊澤鏡之助に植物学を教えたほか、地質学科2年生対象の授業を行った [23] 43; 43] 100-1].

また、正確な時期は不明だが、この年度内に上海のフォーブス (Francis Blackwell Forbes, 1839-1908) [44] 86] と標本の交換を行い、ヴェニスでの地学博覧会にも標本を贈った [43] 102].

○10月 加藤弘之 (東京大学法理文学部総理) に宛てた財政再建案を認める。

矢田部資料に草稿 [VI-63] が伝わる。財政難への対策として、「土木工学」「機械工学」「採鉱学」3学科の廃止を提案した。

1881年 (明治14) 30歳

○6月 長男・秀吉が生まれるが、翌月死去 [2] 102].

○7月14日 東京大学教授に任じられる。

○7月16日 文部省より東京大学理学部勤務を命じられる。

同年6月の職制改定に伴う人事発令。植物園担当は従前通り。伊藤圭介も14日付で員外教授から教授になった。なお、東大の『年報』にも『松村任三の生涯』にも記載がないが、『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』は、15日付で松村が東京大学御用掛を申し付けられ、理学部の生物学職員になったとする [23] 26, 42].

○7月22日 富士山・伊吹山・白山などへ採集に赴く。

『年報』の派遣記録では、この日から26日間の予定で福井・石川両県下に出張とあるが [43] 37], 矢田部資料の「白山行日記」 ([III-3] の前半) から、標記の諸山をこの順にめぐったことが分か

る（ただし記載は8月5日まで）。この採集旅行には松村任三のほか、外山正一、高嶺秀夫、後藤牧太、および内山富次郎（植物園園丁）が同行した。7月28日に道中から発送した採集植物が、8月1日に小石川植物園へ到着している [45] 174]。

○8月31日 大学諮詢会総会の会員となる。

諮詢会は、8月20日付で新たに設けられた大学の管理運営機関。総会の他に学部ごとの部会も置かれ、それぞれ教員によって構成された [46] 433-43]。日記によれば矢田部は明治18年までこの諮詢会に出席する。

□9月 明治14年度の授業が始まる。

14年度の生物学科の学生（この8月より「学生」と改称）は、4年生の石川千代松（動物学専攻）と、2年生の箕作元八および熊澤鏡之助（留年）の計3名 [23] 43; 47] 100-1]。矢田部の担当授業は生物学科2年生向けと地質学科2年生向けであった。ただし前者のうち1名（熊澤を指す）は、矢田部の報文によれば、年度途中で「廃業」した [47] 91]。

○9月24日 正六位に叙せられる。

□9月29日 大久保三郎、東京大学御用掛を申し付けられ、生物学職員となる。

大久保はミシガン大学で植物学を修め、さらにイギリスにも留学。帰国後、内務省や宮内省を経て東大理学部に来た [23] 31-2, 44]。

□11月14日 宮部金吾、東京大学での植物学専修の辞令を受ける。

宮部は同年夏に札幌農学校を卒業後、2年間の東京遊学を命じられた。この月に矢田部と初めて会い、開拓使御用掛の資格で、生物学科2年次の学生と共に学ぶこととなった [18] 95-6]。

□12月、伊藤圭介・賀来飛霞『小石川植物園草木図説』第1巻（丸善書舗）、刊行。

第2巻は1884(明治17)年に、第3巻は1886(明治19)年に、同じく丸善から出版された。

3-2 活動期 明治15年～

明治15年以降、矢田部の活動は多方面に活発化する。本務たる植物学研究においては、講義のほか、引き続き標本の蒐集・交換を精力的に行い、明治15年2月に設立された植物学会の会長に就任した。他に、羅馬字会、女子教育奨励会、日本音楽会にも設立段階から関わり、中心メンバーとして活動した。東京高等女学校長や東京盲啞学校長の任官は、その延長線上にあるものと捉えられ

る。背景としては、森有礼はじめ、外山正一、伊沢修二など、アメリカ留学経験を介してつながる人脈が注目されるべきであろう。

この間は、矢田部資料に毎年の日記 [III-4~10] が伝わるため、主にそれによって記述を行う。

1882年（明治15） 31歳

○1月11日 オランダの「エンチング」へ「生植物一箱」を発送する。

「エンチング」は未詳。12日に追って書簡を出す。

○1月19日 イギリスの「ロールド、ハリス」へ「生植物一箱」を発送する。

「ハリス」は未詳。20日に追って書簡を出す。

○1月 本月にトーム（*Otto Wilhelm Thomé, 1840-1925*）の植物学書を続けて購入する。

○2月25日 東京植物学会創立。会長となる。

小石川植物園で最初の学会が開かれ、矢田部はシダの形状・分類・発生などについて講演した。参加者は24名。この創立から『植物学雑誌』が発行される明治20年2月までの5年間、植物学会はこうした講演のみを行った [48] 266]。

これに先立つ1月25日、大久保三郎、松村任三らが矢田部のもとを訪れ、「共ニ新タニ植物学会ヲ開設スルノ相談ヲ為」している。

□3月 箕作佳吉、東京大学理学部講師に任じられる。

前年夏に帰国したホイットマンの後任であった。12月には動物学の教授となる [49] 402]。

○3月25日 「尚今居士」の筆名で、『東洋学芸雑誌』に「ハムレット」の一節の翻訳が載る。

矢田部の試訳を井上哲次郎が評価したことによる掲載で、新体詩の起源である [50] 213-4; 51]。筆名の「尚今」は、「過去よりも現在を尚（とうと）ぶ」という意味らしい [2] 66]。

○4月2日 一週間の滞在予定で、熱海へ湯治に出発する [52]。

○6月22日 再来日したモースを囲む晩餐会に出席する。

東大の教授らが主催し、築地精養軒で開かれた。出席した福沢諭吉が矢田部に宛てた問い合わせの手紙 [XI-6] が伝わる [53]。

○7月12日 九州へ採集に出発する。

同行者は松村任三と内山富次郎。巖嶽・犬嶽など（豊前）、霧島山（日向）、武生・嬉野（肥前）をめぐる。「九州巡回日記」[III-3]の後半）が伝わる。帰着は8月24日 [54]。

○8月 外山正一、井上哲次郎と共に著した『新体詩抄』(丸屋善七)、刊行。

全19編の詩を収録し、うち9編が「尚今居士」すなわち矢田部によるものである(6編は英語からの翻訳詩、3編は自作詩)。特に「カムペル氏英国海軍の詩」(翻訳詩)は、軍歌として種々の詩集に転載された。

□9月 明治15年度の授業が始まる。

箕作元八が3年生となり、2年次には宮前謙二、大谷津直麿、齋田功太郎が進級。ほかに植物学の撰科生として長松篤斐(あつすけ)と、前年度から引き続き宮部金吾が在籍した[23]46]。当年度の授業は彼らおよび地質学科の2年生が対象であった[55]91-2]。

○12月28日 次女・密(みつ)が生まれる。

1883年(明治16) 32歳

□1月12日 大学講義室においてモースが「進化論一斑」を主題とした講演を行う。

正確な演題は「鳥類の爬虫類の性質」。講演の通訳を矢田部が担当したのかどうかは不明である[24]283]。日記によれば、事前に矢田部は服部一三より、本日の講演があまり宣教師を刺激するものとならないようにと釘を刺された。

○1月25日 「横浜植物商ボンチング氏」より、植物の名称を問う書簡が来着する。

「ボンチング」は、横浜の山手百番地に Creekside Nurseries を構えていたバンティング(Isaac Bunting, 1850-1936)[56]。矢田部はこの頃バンティングとよくやり取りする。

○1月27日 植物学会に出席する。

矢田部が「澱粉」について講演した。

○2月 グレー著・矢田部訳『植物通解』(文部省編輯局)、刊行。

グレーの *Lessons in Botany* を矢田部が訳したものの、刊記は2月だが、実際の出版はそれより遅れたらしい。矢田部は5月14日に文部省より同書の下賜を言い渡され、翌日5部を受け取った。そこから、松村任三、宮部金吾、大久保三郎へ1部ずつを贈っている。

○2月2日 アムステルダム博覧会へ贈る木材扁額12面を選ぶ。

□2月14日 モース、横浜から帰国の途に就く。

○2月27日 丸善書店で洋書3点を購入する。

「スペンサル氏ソーシヤル、スタチツクス」(3円50銭)、「マルシエ氏マン、エンド、ネチユール」

(3円)、「ジョンストン氏アグリコルチュラル、ケミストリ」(3円50銭)。

○3月8日 箕作佳吉、石川千代松らと上野公園へ水産博覧会を見に行く。

日記からは海藻に注目して観覧したことが窺われる。

○3月10日 米国留学生親睦会へ出席する。

○3月12日 イギリスのハリスより、大学へ「生植物壹箱」が到着する。

○3月16日 マクシモーヴィチへの書簡を、翌日ロシアへ発つ花房義質特命全権公使へ托す。

マクシモーヴィチ(Carl Johan Maximowicz, Карл Иванович Максимович, 1827-1891)は、1860-64年に来日し、日本植物相の調査研究を行ったロシアの植物学者。この時は科学アカデミー植物学博物館長を務めていた。この書簡が両者の交流の始まりであり[42]407-09]、9月21日に返信が来着する。

○3月24日 植物学会に出席する。

参会者18名。発表者は矢田部、宮部金吾、大久保三郎、松村任三、沢田駒次郎。

○3月30日 スウェーデンのウィットロックへ書簡を發する。

併せて前日、種子150種を同人へ発送した。これは前年、ウィットロック(Veit Brecher Wittrock, 1839-1914)より長田銈太郎を介して東京大学へ種子が送られ、日本の種子と交換してほしいという要望があったのに応えたもの。送られた種子は、前年のうちに植物園に播いた。

○4月7日 外山正一と共に勝安房(海舟)を訪ねる。

種々の談話をなし、晚餐を得て帰る。

○4月25日 オランダのエンチングより、「鱗根」および「種子」が到着する。

○5月3日 「サックス氏ノ植物書英訳ノ再板ニナリタルモノ」を注文する。

Julius Sachs, *Text-book of Botany*, 2nd ed. (Clarendon Press, 1882) と考えられる。

○5月18日 アメリカからの書簡が来着する。

コーネル大学、ウィスコンシン大学より。

○5月26日 植物学会に出席する。

発表者は矢田部、沢田駒次郎、大久保三郎。参会者は18、9名で、女性「丸橋氏」もいた。

□6月2日 大久保三郎と内山富次郎、植物採集のため伊豆へ赴く。

○6月4日 東洋学芸雑誌社の委員会に出席する。

○6月12日 生物学科第3年、第2年の学期試験を行う。

日記によれば、第3年は「分類植物学」についてすべての講義を終え、かつ年度始めには前年の続きとして「造構学ノ一部」を講義、加えて正科ではないが生理学の導入として「植物ノ化学的成分」も講義したという。第2年は、「植物果実造講」までを講義し、来年は「果実ノ種類」から講義を始めるつもりであるという。

なお矢田部資料には、いずれも年記を欠くが、矢田部の行った講義と思われる一連のノートが伝わる。それらは“Physiological Botany”^[IV-1~2]、“Systematic Botany”^[IV-6~13]、“Structural Botany”^[IV-14~21]と題されている。

○6月23日 植物学会へ出席する。

○7月1日 隈川宗悦、矢田部宅を訪れて歓談する。

隈川はもと幕府軍艦医の医者 [38] 666]。話が父・卿雲の仕えた江川英龍のことに及び、矢田部が隈川に「母ガ嫁セシ時、太郎左衛門 (= 英龍) 氏ヨリ授カリタル心得書」を見せたところ、隈川はこれを貴重なものとして借りて帰った。

□7月11日 大久保三郎、松村任三、内山富次郎の3名、植物採集のために紀州・和州・勢州へ向けて出発する。

本来は大久保でなく矢田部が松村・内山と共に四国へ行くはずであったが、妻・録の体調が思わしくないため、断念した。

○7月14日~9月10日 休暇のため箱根に滞在する。

録の療養も兼ねてのことであった。

□9月 明治16年度の授業が始まる。

16年度から4年次が植物学科と動物学科に明示的に区別されたが、植物学を専攻する4年生はいなかった。生物学科の3年生は宮前謙二と齋田功太郎、2年生は坪井正五郎と白井光太郎と大谷津直磨(留年)の3人。加えて、長松篤斐と土岐儼が撰科生として植物学を学んだ [23] 47]。

この年度以降、大学の『年報』の存在が確認されず、矢田部が行った授業の詳細は明らかにならない。しかし当該年度の『一覽』にある学課課程の記述から [57]、矢田部の担当科目は前年度までと同様と考えられる。

○10月14日 大日本教育会に初めて出席する。

□10月27日 学位授与式で、後に「明治十六年事件」と呼ばれる学生の暴動が起こる [46] 633-43]。

関係学生は退学処分となり、以後数日間、矢田部もその対応に追われた。矢田部は特に自分の受け持ちである理学部生について、退学の結果貧困に陥った者には金銭を援助し、あるいは早期の再入学許可を大学側へ訴えるなど、後々まで親身になって対応している。

○11月15日 米国留学生親睦会に出席する。

○11月24日 植物学会へ出席する。

発表者は矢田部と沢田駒次郎。

○12月10日 箱根で採集した植物標本を学校へ売却する。

330種、代価は49円50銭であった。

□12月27日 松村任三と大久保三郎、助教授に任せられる。

1884年(明治17) 33歳

○1月3日 湯治のため熱海へ出発する。

帰着は1月15日 [58]; 59]。

□2月 伊藤圭介・賀来飛霞編『小石川植物園草木図説』第2巻(丸善書舗)、刊行。

○2月7日 農商務省へ行き、田中芳男と面会する。

5月にロシアのサンクトペテルブルクで開かれる万国園芸博覧会へ、東京大学から出品する植物について相談するため。以後、8日~13日にかけて、矢田部は植物園および植木屋において植物を選定し、発送の準備を進める。

○2月13日 ロシア公使館へ行って宛先を確認した後、出品物を発送する。

○2月15日 マクシモーヴィチと花房駐露公使へ書簡を発する。

マクシモーヴィチへは、出品物の目録も添えた。

□2月16日 西郷従道農商務卿から大木喬任文部卿へ、矢田部のロシア行きについて問い合わせがある。

13日に公使館で矢田部を応対した「訳官マレンダ」が、園芸博覧会へは農商務省で選んだ「委員」ではなく、矢田部を派遣するほうが適当であると公使へ意見したことによる。農商務省ではこれを、矢田部がロシア公使へ頼み込んだと理解したらしく、以後数日にわたって、矢田部は弁解のために関係各所を奔走した。最終的に、矢田部の派遣がないものとなって事が収束するのは、2月23日のことである。

○2月20日 伊藤篤太郎、イギリス留学について

質問するために矢田部を訪れる。

祖父・伊藤圭介の書簡も持参する。篤太郎の留学の話は、前年12月から伊藤家で持ち上がっていた [60] 66-9]。

○2月21日 伊藤圭介より書簡を受け取る。

内容は「孫篤太郎氏ヲ同伴シテ欧州ヘ行クコトヲ [矢田部に] 頼ミタル」もので、あわせて「鴨一羽」も贈られた。矢田部がどのような返答をしたかは不明。なお篤太郎は、翌3月12日、イギリスへ向けて横浜を出発した。

○2月22日 『学芸志林』改良方法取調委員を委嘱される。

○2月26日 上野博物館へ行き、田代安定、小野職蔵に面会する。

万国園芸博覧会について相談した。田代はこのあと、同博覧会に事務官として出席するべくロシアへ出発する [42] 404-5]。

○3月1日 松村任三編纂『日本植物名彙』の序文をローマ字で記す。

英題を *Nomenclature of Japanese plants in Latin, Japanese and Chinese* とし、丸善より出版された。刊記の上ではこの2月の出版となっているが、実際は遅れたらしい。矢田部は閲者 (supervisor) として名を寄せる。

○3月12日 林薫 (はやし・ただす) を訪ね、園芸博覧会出品物の輸送について相談する。

マルセイユからサンクトペテルブルクまで、陸路・海路のどちらを用いるかについて。結局は海路となった。

○3月15日 文部省から「ゆくゆくは教授を日本語で行い、参考書にドイツ書を用いるようにせよ」との内達がある。

対して矢田部は次のような反発を日記に記す。

我等ノ学問ハ、諸邦ノ書ヲ読ムニ非サレバ能ハス。常ニ蘭人露人独人英人仏人等ノ著書ヲ参考スルコトヲ文部省ニテ知ラザルト見ユ。又東洋諸邦ニ英語ノ専ラ行ハルルコトニハ注意セシヤ否ヤ、知ル能ハス。

○3月18日 教授陣で「集会」を持ち、予備門の課程の変更について話し合う。

英・独2語を教えることで大筋の合意に至る。これを受けてであろうか、矢田部は3月26日に「英独対訳文典」を購入し、同30日には終日家においてドイツ語を勉強している。

○3月22日 植物学会に出席する。

発表者は矢田部、沢田駒次郎、大久保三郎。

□3月29日 松村任三と大久保三郎、植物採集のために静岡県江之浦へ出発する [61] 342]。

○4月6日 妻・録と共に鑑画会へ行く。

フェノロサの講演を聞くなどする。この頃、矢田部は鑑画会、また内国絵画共進会にもよく足を運んでいる。

○4月19日 マクシモーヴィチへ書簡を發する。

あわせて前日、押葉360種を發送した。書簡の内容は、園芸博覧会へ参加する事務官・田代安定および東京大学からの出品物について [42] 410]。

○5月8日 海外へ書簡を2通、發する。

「墺国カール、ケック氏」および「米国フレーヤ氏」へ。前者は1886年3月18日の「Karl Keg」と同一人物か。

○5月9日 イギリスより帰国した森有礼を囲む宴会へ出席する。

森はこの4月に駐英公使の任務を終えて帰国し、改めて参事院議官および文部省御用掛に任命されたばかりであった。この宴席において矢田部は森に、「婚嫁ス可キ女子ノ上等学校ヲ設立スルコトノ必要」「英語ヲ中学校ニテ教ユルコトノ必要」の二つを意見する。

○5月20日 米国留学生懇親会に出席する。

○5月23日 菊地大麓と共にリウマチの九鬼隆一を見舞う。

九鬼に対して「今日世界ノ大勢ヲ察スル時ハ大ニ外国語学ヲ興サザル可ラザル旨」および「道徳ノコトハ儒教而已ニ依ラズシテ、普ク善例ヲ取りテ教科書ヲ綴リ、小中学ニテ教ユルヲ良シトスル旨」の持論を述べる。

○6月1日 埼玉県浦和の師範学校において、植物学を講義する。

5月19日に伊沢修二より依頼されたもの。聴衆は師範学校教員を中心とした。

○6月21日 通俗講談会において「花ト虫トノ関係」と題して講演する。

「通俗講談会」とは、大学が一般向けに提供した講演会と思われる。翌年にこの講演を清書して『東洋学芸雑誌』に投稿する。

○7月4日 アメリカに發つ菊池大麓へ、フェノロサおよびファローへの書簡を托す。

ファローへはあわせて「海産類二百余种」を贈った。

○7月5日 植物標品採集のため、長野・新潟・

富山・石川の四県下巡回に出発する。

松村任三、内山富次郎らが随伴し、信州戸隠山、越中山立山などに採集した。帰着は8月2日。道中、戸隠山で7月11日に採集した一草に対して、矢田部は後年、「トガクシシヨウマ *Yatabea japonica* Maxim.」という名を主張する [62]。1886年2月および1888年3月8日を参照。

○8月4日 菊池大麓のアメリカ出張に伴い、理学部長代理に任じられる。

○8月6日～9月4日 休暇のため箱根に滞在する。この間の日記 (III-1) の前半) が伝わる。

○9月7日 予備門入学試験委員を命じられる。

○9月26日 外山正一と共に、神奈川県へ出張する。詳細は不明 [63]。

□9月 明治17年度の授業が始まる。

当年度については大学の『年報』と『一覧』のいずれも確認できず、矢田部の担当授業については詳細不明。在籍者としては、植物学科の最初の4年生である齋田功太郎のほか、生物学科3年生に白井光太郎、坪井正五郎、大谷津直麿、宮前謙二(留年)の4名と、2年生に柘植千嘉衛がいた。植物学撰科生は土岐儻と染谷徳五郎の2人。なお『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』には、この年度の「其他」在籍者として宮部金吾の名前があるが [23] 48, これは誤記であるかもしれない(宮部はこの頃、札幌農学校の新しい植物園創設に尽力していた [18] 149)。

○10月25日 学位授与式に出席する。

○11月3日 鹿鳴館で開かれた井上馨外務卿主催の「夜会」に参加する。

この頃より、鹿鳴館の「舞楽会」「舞踏会」へ参加するようになる。

○11月21日 アメリカのケラーマン(William Ashbrook Kellerman, 1850-1908) より 著書 *The Elements of Botany* が到着する。

書簡はこれより前に到着しており、『日本植物名彙』(本年3月1日を参照)を贈ってほしいと依頼するものであった。

○11月22日 植物学会に出席する。

発表者は矢田部、松村任三、沢田駒次郎。

○12月2日 理学部講義室において羅馬字会創設のための第一回会合を開く。

先立つ11月27日に、発会の案内が諸方面に送られた [2] 85-6。当日の来会者は70名。創立委員は外山正一、寺尾寿、山川健次郎、北尾次郎、隈本有尚、松井直吉、箕作佳吉および矢田部。以後、矢

田部は定期的に羅馬字会の会合に参加する。

○12月27日 ロシアから帰国した田代安定が矢田部を訪ねるが、不在のため会えず。

園芸博覧会において東京大学が金牌を受けたことを、後から伝え聞いた。

1885年(明治18) 34歳

○1月17日 羅馬字会の幹事に選出される [2] 86]。

選挙により、矢田部と神田乃武が選ばれた。

○1月24日 植物学会に出席する。

来会者14名。発表者は齋田功太郎、宮部金吾。

○3月2日 第一回中学校師範学校教員免許学力試験委員を命じられる。

○3月9日 羅馬字会書き方取調委員会に委員の一人として出席する。

この委員会において、羅馬字会として推奨するローマ字の書き方の大筋が決定した。本年6月18日に刊行される矢田部の『羅馬字早学び』(羅馬字会発行)は、それを反映したものである。

○4月30日 女子高等師範学校長・那珂通世より、同校における「舞踏演習」すなわち舞踏会の案内状が届く。

以後、矢田部は鹿鳴館の他、この女子師範学校における舞踏会・舞楽会にも積極的に参加する。

○6月10日 『Rōmaji Zasshi (羅馬字雑誌)』(羅馬字会)、発刊。

この頃から矢田部は、雑誌編集業務のため、連日「羅馬字会事務所」に足を運ぶようになる。

○同月同日 英文読本編纂委員を命じられる。

○6月30日 菊池大麓帰朝につき、理学部長代理を解任される。

□7月 齋田功太郎、植物学科を卒業する。

矢田部の指導を受けて植物学科を出た最初の卒業生である [23] 48。卒業論文のテーマは東京近郊のシダ類であった [64] 6。

○7月16日 年俸三千円となる。

□7月17日 松村任三・内山富次郎・大谷津直麿・白井光太郎・柘植千嘉衛ら、植物採集に出発する。

行先は日光山、白根山、男体山 [61] 342-343]。

○7月20日 「音楽伝習所」の卒業式に列席する。

「音楽伝習所」は音楽取調掛を指すと思われる。矢田部はこの前後から、同所へ「唱歌ノ演習」に出かけるようになる。講師は上真行(うえ・さねみち)など。

□7月23日 佐々木三六、植物学教場付の画工となる。

○8月3日 従五位に叙せられる。

○8月7日～9月7日 休暇のため伊香保に滞在する。この間の日記〔III-1〕の後半〕が伝わる。

□9月 明治18年度の授業が始まる。

前年度同様、矢田部の担当授業は必ずしも明らかにならない。在籍者は、大谷津直麿と白井光太郎の2人が植物学科4年生に進み（共に卒業）、柘植千嘉衛が生物学科3年生に進学。2年生には宍戸一郎が上がった。このほか、染谷徳五郎、田中延次郎、稲次玄三郎、丘浅次郎の4人が「生物学」の撰科生として記されており、矢田部の授業を受けた可能性がある〔23〕50〕。

○9月26日 植物学会に出席する。

発表者は矢田部、松村任三、白井光太郎。

○10月16日 理医学講談会で講演する。

先年始まった「通俗講談会」に類するものと思われる。矢田部は「植物ノ葉」について講演した。同じ内容で11月2日、東京師範学校女子部でも講演している。

○11月 この頃、頻繁に舞踏会へ参加する。

○12月18日 松村任三がドイツ留学へ出発するのを見送る。

同日、浜尾新、三宅秀の欧州出発も見送る。

□12月22日 第1次伊藤博文内閣発足。

あわせて森有礼が文部大臣に就任する。

○12月24日 長女ふみ、病のため死去。6才。

矢田部はこの間、勤務を休んで看病にあたっていたが、叶わなかった。

1886年（明治19）35歳

○1月21日 原田豊吉の紹介により、ドイツの森林学者マイル（Heinrich Mayr, 1854-1911）が大学を訪れる。

大学で腊葉を作らせてほしいと頼んできた。

○1月23日 羅馬字会の総会に出席する。

来会者は1,200名にものぼった。内容は、(1)矢田部の報告、(2)会計報告、(3)事務委員選挙の周知、(4)田中館愛橘から出された議案の検討（多数決で否決）、(5)外務卿井上馨の演説、(6)イギリス公使プランケットの演説。

○1月28日 アメリカ留学へ出発する加藤錦子を訪ねる。

金10円を渡し、アメリカでモースに「学生唱歌ノ書物」を見繕って贈ってくれるよう頼んでほし

いと依頼する。

□2月 伊藤篤太郎の命名になる *Clematis ovatifolia* および *Podophyllum japonicum* が、マクシモーヴィチの論文中に発表される〔65〕415-8〕。

日本人による初の新種命名である〔60〕92-3〕。この時タイプとなったのは、1883年、篤太郎が祖父・圭介と共にマクシモーヴィチへ送っていた一連の標本、印葉図、彩色図であった〔66〕。 *Podophyllum japonicum* については翌年、改めて篤太郎自身が自らの論文に記載し、和名を「トガクシソウ (Togakushi Sō)」と発表した〔67〕434〕。このトガクシソウは、1884年7月に矢田部が戸隠山で採集した植物（トガクシショウマ）と同一種であった。

○2月27日 植物学会に出席する。

発表者は矢田部。

○3月1日 理科大学教授兼理科大学教頭に任じられる。

帝国大学令により、東京大学理学部が帝国大学理科大学と改められたことによる。続く3日、伊藤圭介が非職となる。

○3月9日 理科大学より植物園監督心得を命じられる。

辞令〔X-1〕が伝わる。前日8日、植物園御用掛を務めた賀来飛霞および加藤竹斎が非職となる〔23〕51〕。

○3月10日 第二回中学校師範学校教員免許学力試験委員を命じられる。

辞令〔X-2〕が伝わる。

○3月18日 オーストリアの「Karl Keg氏」へ、押葉500種を発送する。

○3月19日 帝国大学より植物園管理を命じられる。

「監督心得」を経て、正式に「管理」を命じられたものか。ここに「管理」矢田部良吉、「書記」堀誠太郎および平野四郎、「傭」渡部鉄太郎（画工）という植物園の体制が整えられた。この体制は、1891年3月に矢田部が理学部教授を非職となるまで存続する。

□4月6日 箕作佳吉、高等女学校主幹に任じられる。

理科大学教授との兼任。高等女学校は、この年の2月に東京高等師範学校附属高等女学校が師範学校から独立して、文部大臣官房の所属となったもの。続く6月、東京高等女学校と改称された〔68〕33-4〕。

- 4月10日 奏任官一等に叙せられる。
- 4月13日 文部省修文館で中学校師範学校教員学力試験を執り行う。
- 5月6日 文部省より帝国大学評議官を命じられる。

評議会設立の上申書は、森有礼と相談した上で、事前に矢田部と志田林三郎が作成した。

- 同月同日 森有礼に宛てて「教頭ノ職務ニ付伺」という文書を認める。

志田林三郎との連署で、矢田部資料中に控え [VI-47] が伝わる。学長と教頭との職務関係を具体的に明確化するよう要望したもの [69] 60]。

- 5月8日 「擬学位条例草案」に「説明書」をつけて森有礼に提出する。

山川健次郎、櫻井錠二、寺尾寿および矢田部の連署で、文部省が示した草案を練り直したもの。

- 5月21日 横浜で開かれた花卉品評会へ行く。大学からも植物を出品した。

- 6月 帝国大学編纂『帝国大学理科大学植物標品目録』、刊行。

矢田部の序言、松村任三の緒言を付す。理科大学植物学教室が当時収蔵した植物標本の目録で、採集地により日本、支那、朝鮮の3篇に分ける。

- 6月1日 明六社の会に出席する。
- 7月17日 新潟へ植物採集に出発する。

越後清水峠、五頭山、佐渡の金北山、岩代猪苗代地方を廻り、柘植千嘉衛、宍戸一郎、染谷徳五郎、内山富次郎、三好学らも参加した [70]。帰着は8月6日。

- 8月 「演劇改良会」が設立される。

矢田部は発起人の一人であったが、2年ほどで解散した [2] 90]。

- 8月15日 宮部金吾、大久保三郎、牧野富太郎らを招いて食事会を開く。

堀誠太郎も招いたが都合がつかなかった。宮部はこの後、アメリカ留学へ出発する。牧野はこの頃、植物学教室に出入りするようになっていた。

- 8月中旬～9月17日 休暇のため伊香保に滞在する。

ただし母がコレラに罹患したとのことで、一度東京に戻っている。この年はコレラが流行し、大学の始業も9月21日からと延期になった。

- 9月 明治19年度の授業が始まる。

3月の帝国大学令によって、大学の課程が従来の4年制から3年制となった。また、生物学科は動物学科と植物学科に分かれた。ただし実質的に

は、旧課程の2年次から4年次がほぼそのまま新課程の1年次から3年次になったと考えてよい。新制の1年次・2年次では動植物学科として共通の授業が行われた [23] 49]。

19年度の学生は、植物学科3年次に柘植千嘉衛(翌年7月卒業)がおり、動植物学科2年次に宍戸一郎が進み、新制の1年次には三好学、岡村金太郎、稲葉昌丸、相川銀次郎、岸上鎌吉、大町信が所属した。植物学の科目を取った撰科生は染谷徳五郎、田中延次郎、丘浅次郎、池田作太郎で、以上が矢田部の授業を受けたと考えられる。このほかに、卒業生の齋田功太郎がこの年度から大学院に籍を置いた [23] 98]。

なお、齋田は同月に高等師範学校の嘱託(のち教授)となったが [64] 6]、この就職は、矢田部が森文部大臣に推薦したものという [71] 2]。

- 9月29日 「女子ノ学校ヲ興スコト」についての会合に出席する。

出席者は矢田部のほか、外山正一、櫻井錠二、伊沢修二、高嶺秀夫、富田鉄之助、ディクソン (James Main Dixon, 1856–1933)、ショー (Alexander Croft Shaw, 1846–1902)、ピカステス (Edward Bickersteth, 1825–1906)、ノット (Cargill Gilston Knott, 1856–1922)。翌年1月12日に発足する女子教育奨励会につながるものであろう。

- 10月2日 教育博物館において植物学の講義を行う。

5月に手嶋精一より依頼を受けたもの。月1回ほどのペースで継続したらしく、日記では少なくとも翌年の4月2日まで行っている。

- 10月29日 植物学教室へ行幸がある [28] 690]。

- 11月 森有礼へ音楽学校設立の建議書を提出する。

伊沢修二が原案を作成し、櫻井錠二、外山正一、穂積陳重、村岡範為、箕作佳吉、菊池大麓および矢田部、計8名の連名で提出した [72] 285]。

- 12月 訓盲啞院校長を兼任する [73] 25]。

訓盲啞院は東京盲啞学校の前身。以後、矢田部は同院を定期的に訪れるようになる。

1887年(明治20) 36歳

- 1月 この頃、「贈答廃止会」を起こす。

穂積陳重・歌夫妻、外山正一・ふさ夫妻、菊池大麓、矢田部良吉・録夫妻などが発起人となり、行き過ぎた贈答の習慣を是正しようとしたという [2] 67]。

○1月9日 大日本教育会において「女子ノ教育」と題した演説を行う。

この演説をもとにした原稿は、『東洋学芸雑誌』『女学雑誌』『大日本教育会雑誌』『教育新誌』などに重ねて掲載された。

○1月12日 総理大臣伊藤博文官邸で開かれた女子教育奨励会の発起人会に出席する。

同会は東京女学館の設立母体。目的を「日本ノ貴婦人ニ欧米諸国ノ貴婦人ト同等ナル佳良ノ教化及ビ家事ノ訓練ヲ受ケ」させることとし、大学関係者のほか、陸奥宗光、渋沢栄一、岩崎彌助、川田小一郎、福地源一郎など各界の有力者も参加した。矢田部は創立委員の一人に選ばれた [74] 25-37]。

○1月14日 文部省へ行き、牧野富太郎のことについて、手嶋精一と相談する。

相談の詳細は不明。翌月7日に、牧野が矢田部の自宅を来訪している。

□2月 『植物学雑誌』(東京植物学会編輯所)、発刊。ただし、日記にこのことを記す文言は見当たらない。大久保三郎が第1号巻頭の論説「本会略史」に述べるとおり、この頃の矢田部は「公務ノ繁劇」のさなかであった。

○2月1日 明六社の集会に出席する。

日記によれば、この年はこのほか12月1日の同会に出席する。

○2月22日 文部省より、尋常師範学校博物教科用人身生理書編纂審査委員を命じられる。

○2月26日 植物学会に出席する。

○3月17日 奥好義(おく・よしいさ、式部職楽師)と共に横浜へ行き、訓盲啞院のためのピアノを物色する。

○同月同日 日本音楽会が開く第1回目の音楽会に参加する。

同会幹事長は鍋島直大で、矢田部は幹事の一人であった [75] 12-3]。この年、矢田部は「唱歌会」や「和楽会」に頻繁に参加する。

○3月24日 明治廿年尋常師範学校尋常中学校高等女学校教員学力試験委員を命じられる。

○4月9日 尋常小学校作文授業用書編纂旨意書審査委員を命じられる。

□4月14日 大久保三郎と齋田功太郎、植物採集のために伊豆および小笠原へ出発する。

○7月16日 山形・秋田へ採集に出発する。

山形県下の月山・湯殿山・羽黒山、および秋田県下の鳥海山・八郎湖を廻り [76] 131]、三好学らも参加した [70]。帰着は8月12日。

この時、月山で大久保とともに発見したヒナザクラが、後年、新種として発表される [77]。

○8月21日 次男・俊二が生まれる。

□9月 明治20年度の授業が始まる。

20年度は、植物学科の3年生はいなかった。2年次は三好学、稲葉昌丸、岡村金太郎、岸上鎌吉の4人で、1年次は五島清太郎と池野成一郎の2人。植物学の授業に出た撰科生は前年度に引き続き、染谷徳五郎、丘浅次郎、田中延次郎、池田作太郎である。大学院には齋田功太郎に加え、柘植千嘉衛が1年だけ所属した [23]。

○9月26日 『帝国大学植物園植物目録』(東京帝国大学)、刊行。

矢田部の序言、大久保三郎の緒言を付す。編纂は大久保による。

○10月3日 妻・録、死去。30才。

10月5日、谷中墓地に葬る。葬祭は神式。

○10月14日 東京盲啞学校長を兼任する。

官制改定により、訓盲啞院が東京盲啞学校と改称されたことによる。あわせて奏任官一等に叙せられる。

なおこの官制改定では東京高等女学校が新たに文部省直轄学校に加えられ、同校主幹を務めていた箕作佳吉が校長に就任した [68] 34]。

○12月8日 柳田直平の娘・順との縁談がまとまる。

柳田は信州飯田出身の裁判官。媒妁人は鳩山和夫・春子夫妻が務めた。順は矢田部との結婚に当たり、外国人女性の下でマナーを身に着けることを求められたと回想する [79]。なお、矢田部の没後、順の末の妹・孝と結婚し、柳田家の養子となったのが柳田(松岡)国男である [78] 624]。

○12月24日 「植物雑誌編纂ノ会」へ出席する。

1888年(明治21) 37歳

○1月16日 ドイツ留学中の松村任三へ、「辞令」を発する。

松村を大学の「学事嘱託」とし、400円を支給するという内容であった。

○1月28日 植物学会へ出席する。

○3月16日 東京高等女学校長を兼任する。

理科大学教頭・東京盲啞学校長とも兼任のまま。あわせて奏任官一等に叙せられる。

日記の記述によれば、矢田部の校長就任は森有礼の強い働きかけによる。前任者の箕作佳吉は半ば強要される形で、矢田部に職を明け渡した。

○3月8日 本日付でマクシモーヴィチから書簡が発される。

受領日は不明。矢田部〔62〕によれば、トガクシソウ（トガクシショウマ）が新属であることを疑う矢田部と大久保三郎に対して、マクシモーヴィチから *Yatabea japonica* という命名の提案がなされたのは、この書簡中のことである。

しかし正式発表の前、この年の10月に、元の命名者（1886年2月を参照）である伊藤篤太郎が新属 *Ranzania* および新組み合わせ *Ranzania japonica* (*T.Itô ex Maxim.*) *T.Itô* としてそれをイギリスの *Journal of Botany* 誌に発表した〔80〕。これによって篤太郎は矢田部と大久保の怒りを買ひ、「破門」すなわち教室への出入りを禁止されるに至ったと言われている〔81〕。ただし矢田部の日記に関連する記述は認められず、以後も篤太郎が矢田部を訪ねるなど（1890年5月28日および6月22日、1892年3月26日）、両者は何らかの関係を保っていたと窺われる。

○3月31日 明治廿一年尋常師範学校尋常中学校高等女学校教員学力試験委員を命じられる。

○5月7日 理学博士号を授与される。

学位令（勅令第13号第3条）による最初の学位授与で、法・医・工・文・理からそれぞれ5名ずつ、計25名が選ばれた〔46〕964-74〕。

○5月10日 柳田順と結婚する。

自邸にごく親しい人を招き、鳩山和夫が「一通ノ書付」を朗読することで式とした。

○5月16日 文部省において、植物学の教員試験を執り行う。

受験者は11名であった。

○7月5日 東京音楽学校商議委員を命じられる。

○7月16日 四国へ採集に赴く。

内山富次郎、三好学らが同行し、阿波の大歩危小歩危から土佐の潮江山・黒森山・矢筈山を経て、伊予の石槌山へ登った。帰着は8月17日。「四国行日記」（Ⅲ-2）の前半）が伝わる。

この途中、8月9日に石槌山で採集したキレンゲショウマが、同種のタイプ標本となった〔77〕；2〕101〕。

□7月18日 三好学著『植物自然分科一覧表』（丸善商社）、刊行。

矢田部が題言を寄せた。続く9月には白井光太郎が『植物自然分科検索表』（東京敬業社）を刊行するなど、植物学教室から順調に後進が育ちつつ

あった。

□8月 松村任三、帰国する〔61〕343〕。

○8月中旬～9月17日 休暇のため箱根に滞在する。「箱根行日記」（Ⅲ-2）の後半）が伝わる。

□9月 明治21年度の授業が始まる。

21年度は、植物学科3年次に三好学と岡村金太郎が進級し、共にこの年度で卒業する。動植物学科では2年次が五島清太郎と池野成一郎で、1年生として松井敬勝と堀正太郎が入ってきた。植物学関係の撰科生は田中延次郎と、松田定久・中村象太郎という3人であった。また、齋田功太郎が引き続き、大学院に所属した〔23〕101-2〕。

○11月28日 モース著・矢田部訳『動物学初歩』（丸善商社）、刊行。

モースの *First Book of Zoology* を、矢田部が口訳し、東京大学予備門教員・古屋矯が筆記したもの。同書はもと、1879（明治12）年に文部省が翻訳に着手したが、モースの帰国により中止されたという経緯がある〔24〕184〕。

○12月2日 大学通俗講談会で「苔蘚の話」と題する講演を行う〔VI-27〕。

3-3 転換期 明治22年～

順調に進展していた矢田部の活動が、大きな転機を迎える時期である。端緒は明治22年2月11日、森有礼の暗殺にあると見てよい。

欧化開明的であった森の文政改革は、大胆であっただけに、その揺り戻しも激しかった。一つの現れとして、世間では女子教育を批判する風潮が盛んになり、矢田部は東京高等女学校長としてその矢面に立たされた。同校の突然の廃校も、そうした文脈の上に捉えられるものである。つまり矢田部の女子教育への参画は、支援者である森を失ったことによって挫折したのであった。矢田部はこれを機に、自らの仕事を植物学分野に集中するようになる。

この時期についても、日記〔Ⅲ-11～13〕を主な史料として記述を行う。

1889年（明治22） 38歳

○1月10日 文部省で久保田譲と面会する。

東京高等女学校の増築と盲啞学校の移転について相談する。以後の日記に、この件に関する記述が散見される。

○1月28日 文部大臣官邸において開かれた直轄学校長等の集会に参加する。

似た趣旨の集會に2月8日も出席する。

○2月11日 紀元節、祝賀のため皇居門外まで女学校生徒を引率する。

□同月同日 森有礼、永田町官邸玄関前において刺され重症を負う。翌12日、死去。

犯行に及んだ西野文太郎は、斬奸状（「森有礼暗殺趣意書」）の中で伊勢神宮における森の「不敬」を糾弾した [82]。

○2月16日 森有礼の葬儀に参列する。

11日以来この日まで、矢田部は毎日森邸へ足を運び、葬儀では外山正一らと共に棺の側に「歩従」した。以後、8月頃まで、日記の記述は極端に少なくなる。

○4月1日 雑誌『国の基（国乃もとゐ）』（興文社）、発刊。

東京高等女学校の教員らで立ち上げた女子教育雑誌。矢田部は発刊発起人代表であり、「定約書」[X-6](#)が伝わる。

□4~5月 改進黨新聞に須藤南翠による小説「濁世」が連載される。

同小説は、「東京貴婦人学校」の校長である「理学博士刑部襄一（おさかべ・じょういち）」、その生徒「梁ヶ瀬順子（やながせ・じゅんこ）」という、明らかに矢田部と妻・順を連想させる登場人物らが、道徳的な仮面の下で醜悪な情欲に身を任せる様子を嘲罵的に描くもの。この小説をきっかけに、真偽は二の次として女学生の醜聞を書き立て女子教育を批難する風潮が、この年の社会に蔓延した [83] 6-7。対する矢田部は、改進黨新聞を相手に訴訟を起こした [84]。

○9月10日 東京高等女学校で大儀見元一郎を雇う辞令を出す。

大儀見は牧師で、明治3年から15年までアメリカで神学を学んだ人物である。

○9月12日 東京高等女学校で初めて「倫理書」の講義を行う。

この「倫理書」とは、森有礼の指示により編纂された中学校・師範学校用の教科書『倫理書』（明治21年3月、文部省編輯局）ではないかと推測される。

○同月同日 嘉納治五郎の欧州行き送別会に出席する。

参会者98名。矢田部は幹事の一人であった。

○9月23日 箕作麟祥へ、その祖父・阮甫と父・省吾が矢田部の父・卿雲へ宛てた書簡を贈る。

かねて麟祥より依頼があったもの。受け取った

麟祥は、翌日、礼に訪れた。

□9月 明治22年度の授業が始まる。

22年度は、植物学科の3年次に池野成一郎が所属（翌年7月卒業）。動植物学科の2年次に松井敬勝と堀正太郎が上がり、1年次には藤井健次郎と藤田經信がいた。撰科生は植物関係では松田定久のみ。大学院には齋田功太郎に加え、卒業したばかりの三好學と岡村金太郎が籍を置いた [23] 103]。

○9月25日 アメリカのグレー婦人とファローへ、『植物学雑誌』を送る。

矢田部が著した「グレー氏の略伝」が掲載される同誌2巻14号（明治21年）であろう。

○10月 この頃、よく勤工場に出かける。

○11月8日 女学校で「人ノ名誉ニ対スル義務」という題の講義を行う。

詳細は不明だが、この年に矢田部が巻き込まれた醜聞問題と無関係ではないであろう。

○11月22日 富士見軒で開かれたダーウィン会へ参加する。

『種の起源』の出版30周年を記念した会。来会者は8~90余名。矢田部はこの会に、小石川植物園から植物を出品した。

○11月23日 伊沢修二から、その訳によるハクスリー『進化原論』を贈られる。

10月25日に丸善商社より出版されたもの。伊沢はこの10年前に同書の部分訳を出しており、それが日本国内における進化論関係書の第1号と言われる [85] 309。ただ、ハクスリー（Thomas Henry Huxley, 1825-1895）が行ったこの進化論の講演は、矢田部自身も翻訳を試みており、その2種類の訳稿 [VI-1~3, 5~7](#) が存在している。これと伊沢の訳著との関係は未詳である。

○12月1日 改新新聞から「謝状」が届いたため、訴訟の取り下げを決める。

○12月31日 徳島師範学校教員の古沢角三郎が来訪する。

古沢は、前年矢田部らが植物採集のため四国を巡回した際に、徳島から土佐までを同行した。

1890年（明治23） 39歳

○1月10日 明六社の集會に出席する。

日記によれば、本年はこのほかに6月、7月、12月（いずれも1日）の同会に出席する。

○1月16日 西澤之助が来訪する。

雑誌『国光』を創刊するにあたって、大学の人

材から原稿を得たいという相談であった。矢田部は後日、適当な人物を選んで紹介した。

○1月25日 小石川指ヶ谷町にある内務省の「菜薬試植園」へ行く。

来る2月1日を以て同園の土地を盲啞学校の敷地とし、事業を小石川植物園が引継ぐと決まったため、小西信八、堀誠太郎も立ち会った。

○1月29日 鹿鳴館で開かれた山縣有朋主催の夜会に出席する。

以前ほど頻繁ではないが、この頃も、鹿鳴館へは出かけている。

○2月11日 紀元節。女学校において教員・生徒で紀元節の唱歌を歌う。

○2月12日 森有礼の一周忌。法事に参列する。

○2月22日 植物学会に出席する。

○3月6日 文部省総務局へ行き、来る31日に大儀見元一郎を女学校の教諭に任ずる稟議書を作らせる。

○3月19日 三好学が採集した地衣類163種を、スイスのミュラー（Johann Müller, 1828–1896）へ送る。

この経緯は三好の「新称日本地衣」[86]に詳しい。

○3月22日 東京盲啞学校の卒業式に出席する。

□3月25日 官制改革により、東京高等女学校の廃校が決まる。

同時に高等女学校の校長職も廃官となる。矢田部はこれを、この日の朝、官報号外で知った。

○3月26日 東京盲啞学校長の辞表を辻新次へ提出する。

辻は重ねて慰留を試みたが、矢田部の辞意は揺るがなかった。6月6日に正式に免官となる。

○3月29日 東京高等女学校の卒業式に出席する。

日記 [III-12] に次のように記す。

本日東京高等女学校ノ卒業式アリ。雨天ニモ拘ラズ、来会者大ニ多シ。生徒モ皆能ク其エキセルサイス [exercise か] ヲ為シタルハ、私ニ余ノ面目ト思フ。夕刻、教員一同、余ヲ富士見軒ニ招待シタリ。是ハ此度ガ高等女学校ノ独立ノ最終ノ卒業式ニシテ、余モ亦以後同校ニ関係ヲ絶ヲ以テナリ [以下略]

○4月26日 植物学会に出席する。

発表者は三好学、大久保三郎、牧野富太郎。

○5月 この頃、『国の基』の廃刊を決める。

同誌は前年12月、石川書店（石川保助）と販売委託契約を結んだばかりであった [X-6, 7, 9]。この件について矢田部を補佐して実際に動いていたのは平田盛胤である。

□5月20日 加藤弘之、帝国大学総長に任じられる。

前任者の渡辺洪基は、駐オーストリア特命全権公使となる。

○5月24日 植物学会に出席する。

発表者は矢田部、岡村金太郎。

○5月28日 伊藤篤太郎が来訪する。

用件は不明。

○6月6日 依願により東京盲啞学校長を免官となる。

後任は伊沢修二 [73] 33]。

□6月12日 東京農林学校を帝国大学の分科大学とするという勅令が出る。

この勅令に評議会が反発を示し、翌13日には評議官一同が辞表を提出する事態にまで発展する。矢田部も一連の経緯を日記に書き留める。

○6月17日 臨時賞与150円を下賜される。

東京盲啞学校長兼任中の盡力功勞に対して [87]。

○6月22日 田代安定、伊藤篤太郎、共に来訪する。

用件は不明。

○6月28日 植物学会に出席する。

発表者は田中延次郎、岡村金太郎。

○7月3日 文部省より東京盲啞学校商議委員を命じられる。

校長の辞任については譲らなかった矢田部であるが、商議委員は引受けた。

○7月6日 田中延次郎が、菌害についての意見書を持参して来訪する。

矢田部は、これを農商務大臣へ渡すことを約束した。

□7月10日 帝国大学卒業式が挙行される。

植物学教室からは池野成一郎が卒業した。

この7月で帝国大学の明治22年度が終了するが、ここから、日記に記される矢田部の仕事の性質が大きく変化する。すなわち、理科大学教授としての職務、植物学の指導と研究に関する記述がその大半を占めるようになる。

○8月20日 麹町区富士見町明治義会において、食虫植物に関する「講談」を行う。

植物学会が主催したものか。15日、27日には田中延次郎が講談した [88]。

○8月21日 帝国大学より、農科大学学科設置商議委員を命じられる。

○8月27日 植物園に「ガワールド(ガウワルド)氏」が来訪する。

ガワールドは、1893年に開かれるシカゴ万国博覧会の「委員」で、植物園の庭園を撮影するなどした。

○8月28日 三好学の英語論文“Notes on *Pinguicula ramosa*, sp. nov.”を校正する。

三好が庚申山で発見した食虫植物の記載論文。翌9月発行の『植物学雑誌』4巻43号に、和文・英文の両方で掲載された。

この頃の矢田部は、田中延次郎や岡村金太郎にもそれぞれ英語で論文を書くように指導している。それらの校正は、自身で行うほか、神田乃武にも依頼した。

○8月29日 ロンドンに留学中であった坪井正五郎へ書簡を發する。

「拉丁文ノ旧植物教科書ノ古本」を買って送ってくれるように依頼した。

□9月 明治23年度の授業が始まる。

23年度の学生は、植物学科3年次に堀正太郎が在籍し、翌年7月卒業する。藤井健次郎と藤田經信が2年生になり、1年生には三本貞守と岡三治郎が入学した。植物学の撰科生は引き続き松田定久のみであった。この年度の授業出席者名を記した帳面 [IV-34] には、上記のうち岡を除く5名と、地質学科1年生2名の名前がある。大学院には齋田功太郎、三好学、岡村金太郎、池野成一郎がいた [23] 103]。

○9月4日 「キレンゲシヨーマ」の記述に着手する。

記載論文の執筆が日記に現われる初めである。以後日記では、ほとんど毎日具体的な植物名を挙げて執筆の進捗が記されるが、本年譜では煩瑣を避けていちいち掲出しない。

○同月同日 渡部鋤太郎(画工)らと『日本植物図解』の図について相談する。

直接の関連は不明ながら、同書第1冊第1号の図版校正刷が矢田部資料中に存在する ([VII-10]の一部) [89] 108-9]。

○9月9日 文部省より、学位試験主務委員を命じられる。

齋田功太郎の論文審査のための委員である。齋

田は翌24年8月24日に理学博士号を取得するが、それは大学院を修了して論文を提出した学生に対する最初の学位授与(全学術分野を通じて)であった [23] 106]。矢田部は主務委員として、大学総長や文部大臣へ以後度々働きかけを行う。

○9月10日 田中長嶺(たなか・ながね)が、内国勲業博覧会で得た「三等進歩賞」の賞状とメダルを持って来訪する。

田中長嶺は椎茸栽培法の開発などで知られる殖産家。田中芳男の勧めにより、この年行われた第3回内国勲業博覧会に、椎茸のほか松露、キクラゲなどの栽培法を發表した [90] 74]。

○9月13日 依願により帝国大学評議官を免官となる。

9月8日に辞表を提出していたもの。辞令 [X-3] が伝わる。

○9月14日 宮部金吾へ書簡を發する。

この書簡の中で、矢田部は植物学研究に対する自らの決意を表明する。秋月による要約紹介を次に引用しよう [91] 160]。

[前略] 小生はこれまで引受けていた種々の仕事を整理して植物学に専念することにした。『植物学雑誌』には英文の論説などを加え、広く世界に配布したいので貴下にもご助力願いたい。これまで欧州の植物家に日本の植物の新種を贈れば日本人の功を悉く奪われることがあったので、今後は『植物学雑誌』によって自ら新称を世界に披露したい。

□9月15日 松村任三、理科大学教授に任じられる。

○9月21日 高嶺秀夫を訪ね、帝国博物館長・九鬼隆一に取り次いでほしい旨、依頼する。

同館収蔵の腊葉標本を参照するため。

○9月27日 植物学会に出席する。

報告者は矢田部、田中延次郎、岡村金太郎、大久保三郎。

○9月28日 田代安定が来訪するも、出かけていたため会えず。

用件は不明。

○10月1日 繁業のため、羅馬字雑誌の編集を別人に托すことに決める。

○10月5日 伊藤圭介の米寿祝賀展覧会を見学する。

「皆古風ノモノナリ」と感想を残す。

- 10月6日 三男・雄吉が生まれる。
10月12日に出生届を提出する。
- 11月2日 牧野富太郎へ、大学の書籍・標本を使って自著を編纂することを止めるように言い渡す。

日記 [III-12] に次のように記す。

夜ニ入り牧野富太郎来ル。氏ハ近頃大学ニテ既ニ斎頓シタル標本及書籍ヲ使用シテ、自己ノ著述ニ用フルコトヲ始メ、為メニ教室ニテ議論アレバ、之ヲ爰ニ止メタリ。尤モ氏ガ謝恩ノ為メニ氏ノ採集シタル土佐植物標本ヲ一揃ヒ、大学ニ納ムルコトヲ約セシメタリ。

- 11月15日 丸善書店より、『日本植物図解』の出版を引受けるといふ内諾を得る。
- 11月22日 新宿でワインマン『植物図譜』およびドドネウス『草木誌』を含む「山本某氏ノ古書」を見る。
いずれも江戸時代の本草学者が参照した貴重洋書。「山本某氏」は京都の山本読書室当家主・山本復一（またいち）と思われる [92] 16-7]。
- 11月26日 渡辺協が土佐産植物430種を持参する。

1種10銭で購入した。渡辺は翌12月2日から植物学教室の「臨時雇」となる [23] 104]。

- 同月同日 田中長嶺、かねて矢田部より依頼のあった岩崎灌園『本草図譜』（文政11年自序）の写本を持参する。

矢田部資料中にある『本草図譜』巻10および11の写本 [VIII-3, 4] は、この時のものか。

- 12月4日 海外へ書簡5通を発する。
ファロー、およびコーネル大学植物学教授ダドレー (William Russel Dudley, 1849-1911) [13] 156] への書簡を含む。

- 12月12日 アメリカのカンザス農科大学への書簡を認める。

スモモなどに関する質問への返答である。

- 12月21日 『庚申新誌』の記者・手塚猛昌より、論説を依頼される。

1月14日、「学校ノ存廢ハ輕率ニ定ムベキモノニ非ズ」といふ論文を同誌へ送る。

『植物学雑誌』に示された矢田部の姿勢

宮部金吾への書簡にあるとおり、植物学研究に専念することを決意した矢田部がまず目指したの

は、『植物学雑誌』の学術性を国際的なレベルにまで高めることであった。それまで矢田部が同誌に寄せたのは、グレーとリンネの略伝という教養的な読み物のみであったが、本年の夏以後、専門性の高い論文を、主に英語で、精力的に執筆していく。同時に次の3報によって、異なる人々にそれぞれの呼びかけを行った。

a. 「植物学を修むる者の学ぶべき国語」

4巻43号, 19-21頁。学生もしくは国内の研究者へ向けて。海外の研究に学び、海外の研究者と交流し、かつ自身の研究を国際的に発信するために、独・仏・英語という3つの「活語」、およびラテン語という1つの「死語」を学ぶことの必要を説く。学問の水準ではドイツ語が、東洋で広く使用されているという点では英語が優勢であると述べる。

b. “A Few Words of Explanation to European Botanists” (邦題：泰西植物家諸氏ニ告グ)

4巻44号, 355-5頁。海外の研究者へ向けて、東京植物学会会長 (President of the Tōkyō Botanical Society) として。これまでの努力により多少の文献と標本とが帝国大学に備わってきた今、少々の不足はあるかもしれないが、敢えて欧米の研究者に頼らず日本植物の記載を本誌上に始めると述べる。

c. 「地方の植物学教員に望む」

4巻45号, 397-8頁。地方の植物学教員、すなわち全国のアマチュア研究者へ向けて。現地の植物を積極的に植物学教室へ送ってほしいと依頼し、腊葉作成の要点を示す。それが植物学教室に「全国の植物標本を完備する」手助けとなり、また当の教員にとっても授業および研究において有益となる旨を説く。

3-4 非職期 明治24年～

女学校や盲啞学校、また帝国大学評議会における諸学務を手放し、いよいよ本務たる植物学研究に集中しようと動き始めたその矢先、矢田部は東京大学を非職 (休職) とする。原因はその「不人望」にあった、というのは親友・外山正一の弁であるが [10] 544-52]、事実、矢田部はこの頃、菊池大麓・箕作佳吉兄弟と何らかの対立関係にあった [69] 65-66; 93] 74]。本年譜に示したとおり、箕作は矢田部のために東京高等女学校長職の辞任を強要されており、直接的ではないにせよそれも要因の一つとなったことは十分に考えられる。

前年から『日本植物図解』の出版に取りかかっていた矢田部は、非職を命じられた後も、「非職満期」として正式に東大を免職になるまで、粘り強く植物学上の執筆と研究を続ける。

この間も日記 III-13~15 を主な史料として記述を行う。

1891年（明治24） 40歳

□ 1月9日 『植物学雑誌』5巻47号，刊行。この巻から横書きとなる。

「本雑誌体裁ノ変更ニ就キテ」と題された無署名の趣意説明が載る。矢田部資料中にその原稿 VI-89 が見出せることから、それを著したのが矢田部であると判明する。

○ 1月13日 海外へ書簡を2通，発する。

オーストリアおよびスイスへ。

○ 1月30日 伊沢修二より国家教育社の客員になってほしいという依頼があり，承諾する。

同日，「国家教育論二就キテ」という論文を著わす。

○ 1月31日 植物学会に出席する。

発表者は矢田部，田中延次郎。

○ 2月1日 明六社の集會に出席する。

日記によれば，本年はこのほかに3月1日，11月1日，12月1日の同會に出席する。

○ 2月2日 海外へ書簡を2通，発する。

ロシアのマクシモーヴィチ，イギリスのキュー植物園園長シセルトン＝ダイアー（William Turner Thiselton-Dyer, 1843-1928）へ。

○ 2月15日 群馬県の桐生教育會開會式において「教育と學問」と題して講演を行う。

原稿 VI-45 が伝わる。

○ 3月4日 マイル，帰國の挨拶のため植物学教室に來訪する。

この時マイルより，著書 *Monographie der Abietineen des japanischen Reiches*（大日本樞科植物考）に掲載する毬果一通りを教室へ贈られる。

○ 3月5日 海外へ3通，国内へ2通，計5通の書簡を發する。

「露國オテッサ [オデッサ]」の植物園，清國の大鳥圭介，ドイツの「カール，ツアイス」，土佐の某，そして札幌の宮部金吾へ。

○ 3月17日 欧米への書簡7通を認める。

この時の1通と思われるものがハーバード大学所蔵のグレー宛書簡集に収録される [94]。発信日は3月18日で，用件は『植物学雑誌』など出版

物の交換について。この書簡において矢田部は、『日本植物図解』第1冊第1号が翌月に出版予定であると記す。

○ 3月31日 理科大学教授の非職を命じられる。

自宅宛ての書面による突然の通達であった。同時に植物園管理も免職となる。

○ 4月7日 来日中であったハーバード大学標本館長グーデール（George Lincoln Goodale, 1839-1923）が來訪する。

矢田部はこの後，グーデールの依頼を受けて，内山富次郎に標本を採集させている。

○ 5月12日 日記に「本日ヨリ大学ニ行き著述事業ニ従事ス」と記す。

以降，従前通り，具体的な植物名などを挙げながら著述の進捗を記す。矢田部は非職の通知を受け取った直後から，「著述丈ハ続ケタキ旨」を総長・加藤弘之へ談判していた。

○ 6月22日 海外への書簡5通を認める。

○ 6月27日 勲六等に叙せられ，瑞宝章を賜る。

□ 7月10日 この日発行の『植物学雑誌』5巻53号「雑録」に，「矢田部氏新著植物書」という一報が載る。

矢田部が多年計画していた著述として『日本植物図解』『日本植物編』『日本羊齒編』の3書を挙げ，それぞれ次のように説明する。

『日本植物図解』は，本邦産植物について英和両文で解説し，その精図を載せるもの。大部の書であるが，まずは第1冊第1号を丸善商社から出版するべく印刷中である。

『日本植物編』は，既知の本邦産植物を網羅するもの。部分的に英文草稿が完成するほか，簡略な和文でも著述を進めている。初部はすでに脱稿したので，近日中に出版されるであろう。

『日本羊齒編』は，英文の専門書であるが，出版はしばらく見合わせる事となった。

○ 8月3日 大日本教育會主催の夏期教員講習會において，植物学の講義を行う。

一橋の高等師範学校付属学校において，本日から8月30日まで，計17回の講義を行った。聴講者は120~130名で，尋常小学校の教員など。

○ 8月18日 『日本植物図解』第1冊第1号（丸善商社），刊行。

欧文タイトルを *Iconographia Florae Japonicae; or Descriptions with Figures of Plants indigenous to Japan* とする。

□ 8月19日 三好學，ドイツ留学へ出發する [28]

86].

三好は非職以後もよく矢田部を訪れ、留学が決まったことを報告するなどしていた。

○8月21日 植物学卒業生一同より、蒔絵の葉巻箱と盆を贈られる。

齋田功太郎、三好学、白井光太郎、田中延次郎、染谷徳五郎、岡村金太郎、柘植千嘉衛、池野成一郎、堀正太郎、松田定久の計10名からであった。

○8月24日 文部省において博士学位授与式に列席する。

松村任三のほか、矢田部が審査主務を務めた齋田功太郎も無事に理学博士号を授与された。なお、齋田の学位論文のテーマは東京付近の淡水藻類である〔64〕6].

○8月28日 フーカー著、矢田部良吉訳『植物学初歩』（丸善商社）、刊行。

原書は、Joseph Dalton Hooker, *Botany*, 3rd ed. (New York: D. Appleton and Company, 1884) である。

○11月23日 仙台第二高等中学校において「植物体中物質の変化」と題して講演を行う。

原稿〔VI-34〕が伝わる。

○12月22日 『日本植物編』を「文部省の依頼により」著述すると決まる。

日記の記述によると、1883年に出した『植物通解』の「続編」ということで、矢田部から文部省へ話を持ち込んだものらしい。

○12月30日 書簡6通を発する。

キュー植物園のシセルトン＝ダイアー、ライプチヒの三好学、宮部金吾、外山正一、横浜のッキング(Samuel Cocking, 1845–1914) および内山富次郎へ。

1892年(明治25) 41歳

○1月5日 明六社の集會に出席する。

日記によれば、本年はこのほか、2月および9～12月(いずれも1日)に行われた同會に出席する。

○1月8日 画工・西野猪久馬と面會する。

『日本植物編』の挿画を担当してもらうため。1月11日より大学へ出勤することになった。矢田部資料には、西野が描いた原画と見られるものが含まれている〔VIII-1〕。

○1月23日 植物学会に出席する。

○1月31日 銅板師・一ノ宮福太郎へ書簡を發する。

「ワタナベソウ」図の試し刷りに、訂正すべきところがあったため。同図は『日本植物図解』第1

冊第3号に掲載された。

○2月1日 大日本図書株式会社へ行き、『日本植物編』の挿画料を受け取る。そこから、西野猪久馬へ1月分の日当を払う。

以後、西野へは毎月初めに前月分の日当をまとめて支払う。

○3月3日 アメリカのグーデルへ、渡辺協が所持する標本の売却について書簡を發する。

7月28日に購入代金110ドルを為替で受け取った。

○3月11日 『日本植物図解』第1冊第2号(丸善商社)、刊行。

○3月26日 伊藤篤太郎、來訪する。

用件は不明。

○4月7日 イギリス人ヴィーチ (James Herbert Veith, 1868–1907) が來訪する。

キュー植物園副園長モリス (Daniel Morris, 1844–1933) の紹介状を携えて來た。

○5月11日 『植物学初歩』再版の校正刷りを丸善へ渡す。

○7月29日 伊藤篤太郎ほか3名へ、書簡を發する。

○9月1日 文部省へ『日本植物編』の草稿計4冊を渡す。

翌10月1日、原稿料を受け取る。以後、一段落がついたのか、執筆に関する日記の記述は減少する。

○10月12日 木版彫刻師・宮田六左衛門、來訪する。

『日本植物編』の挿画を彫刻する人である。

○11月16日 羅馬字會委員會へ出席し、來月限りで『羅馬字雜誌』を廃刊することに決める。

同誌は結局、第7冊まで刊行されたと見られる。矢田部資料には第1～5冊が伝わる〔II-1～5〕。

1893年(明治26) 42歳

○1月5日 明六社の集會に出席する。

日記によれば、本年はこのほか2月1日、3月1日の集會に出席する。

○1月9日 花房義質を訪ねる。

朝鮮駐在公使・大石正巳に当地の植物を送ってくれるよう依頼するため。

○1月16日 シセルトン＝ダイアーへ質問状を出す。

○1月23日 英国藥学会より、通信員に選出された証書が届く。

○2月14日 アメリカの「教育局長ハリス氏」より、來7月にシカゴで開かれる「エヂユケーショ

ナル、コンGRES」の案内状が来着する。

矢田部を「高等教育部副会長」の一人に任命したいということであった。実際に出席したかどうかは不明。

○3月19日 神田乃武と面談する。

「正則中学校」と「明治議會中学校」を合併することについて相談した。

○4月26日 大日本教育会より評議委員を依頼される。

○5月14日 荻村金三郎という人物が志賀重昂の紹介状を持って来訪する。

植物について質問するため、23日にも訪れた。

以後、本年の日記には目立った記述が無くなる。また、日記そのものも翌年から明治31年までは矢田部資料中に伝わらない。

○10月7日 『日本植物図解』第1冊第3号（丸善商社）、刊行。

○10月24日 四男・達郎が生まれる。

1894年（明治27） 43歳

○3月31日 非職満期となる。

在官満12年以上につき、年俸月額6ヶ月分を下賜される。

○4月16日 正五位に叙せられ、特旨によって位一級進む。

4. 高等師範時代

1895～1899年（明治28～32）

非職満期となった矢田部は、ほどなくして活動の場を高等師範学校へ移す。そして、あれだけ熱心であった植物学上の執筆を、東大を離れると同時にまったく止めてしまう。大学と関係を絶つということは、教室が収蔵する文献や標本とも関係を絶つということであるから、執筆も諦めざるを得なかったのであろうか。

この間、没年を除いては日記も残らないため、履歴書の行間からその活動を想像するしかない。ただしこの時期の履歴書 [X-4] の記述には、『近代文学研究叢書 第4巻』[2] 所収の履歴書と相違する点が散見される。以下では、前者のみに記される事項には*を、後者のみに現れる事項には**を付す。

師範学校で英語を教え始めて三年ほどで校長職に就くなど、仕事はおおむね順調であったと見える。その英語教授がいかに厳密で正確であったか

は、当時同僚もしくは生徒であった人々が後年に証言する [11]; 95)～99]。

1895年（明治28） 44歳

○1月9日 高等師範学校より、同校付属学校尋常中学科英語教授を嘱託される。

報酬として180円を得る。

○4月4日 高等師範学校教授に任じられる。

あわせて高等官三等に叙せられ、五級俸を下賜される。当時の高等師範学校長は嘉納治五郎であった。

1896年（明治29） 45歳

○3月25日 第九回尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校教員検定委員を命じられる。

○3月27日 五男・勤吉が生まれる。

墓誌（谷中墓所）の記述に基づく。

○6月11日 愛知・静岡・岐阜へ出張を命じられる。*

○6月20日 尋常師範学校・尋常中学校教員講習会英語学講師を命じられる。*

○9月16日 尋常中学校教科細目調査委員を命じられる。**

1897年（明治30） 46歳

○3月29日 第十回尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校教員検定委員を命じられる。*

○4月27日 俸給令改正により七級俸を下賜される。*

○6月19日 京都・大坂・奈良・滋賀へ出張を命じられる。*

○6月24日 尋常師範学校・尋常中学校教員夏期講習会英語科講師を命じられる。*

○9月16日 尋常中学校教科細目調査委員を命じられる。*

1898年（明治31） 47歳

○1月28日 第十一回尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校教員検定委員を命じられる。*

○3月28日 賞金150円を下賜される。*

「本務外英語教授法取講」の勉励に対して。

○3月30日 尋常中学校教科細目調査委員として手当金45円を受け取る。*

○4月4日 高等師範学校付属音楽学校教授を兼任し、主事を命じられる。

あわせて高等官三等に叙せられる。同校は、東

京音楽学校が明治26年6月以来、師範学校の附属へと格下げされていたもの。この翌年、東京音楽学校として再独立する（1899年4月23日参照）。

○4月30日 尋常中学校教科細目調査委員を解かれる。

○6月20日 高等師範学校長に任じられる。

同校教授と兼任。あわせて高等官三等に叙せられ、一給俸を下賜される。校長就任により附属音楽学校の主事からは離れ、渡辺龍聖がそれを後継した。また、矢田部は師範学校長として、音楽学校の第5代校長に相当する〔72〕4-5, 423〕。

○7月4日 師範学校・尋常中学校・高等女学校教員検定委員を命じられる。*

○10月1日 明六社の集會に参加する。

外山正一の日記〔100〕から、この日と11月1日および12月1日の會に参加したことが知られる。

1899年（明治32）48歳

日記〔III-16〕を介して明らかになる本年の矢田部の暮らしぶり、働きぶりのうち、以前と際立って異なるのは、その往来の多さである。前年に高等師範学校長となった矢田部のもとへは、入学・就職・進学・留学等の相談や挨拶のため、ほぼ毎日、複数人の学生や卒業生、入学・就職希望者、あるいは各地方の学校長などが訪れた。矢田部も各所へ足を運んでいる。

しかしそのような繁務のなかにあっても、植物学教室の教え子とのつながりは保たれていた。以下ではその点に特に着目して記述を行う。

○1月5日 明六社の集會に参加する。

日記によれば、本年は以降毎月1日、同會に出席する。

○2月4日 第十二回師範学校・尋常中学校・高等女学校教員検定委員を命じられる。*

○2月9日 文部省で開かれた「理学博士会」に出席する。

○2月11日 六男・敏夫が生まれる。

末子である。矢田部は最初の妻・録との間に2男2女、2人目の妻・順との間に4男、計6男2女をもうけた。このうち四男・達郎は心理学者として、五男・勁吉は声楽家として名を残す。

○3月11日 ドイツ留学中の齋田功太郎と市川（田中）延次郎へ書簡を發する。

○4月5日 俸給令改正により二級俸を下賜される。

○4月23日 東京音楽学校の独立祝賀會に列席

する。

○5月21日 白井光太郎が来訪する。

矢田部へ英語論文の校正を依頼した。

○6月3日 京都・大坂および愛知・静岡へ出張を命じられる。*

6月7日出発、同16日帰着。各地の中学校、師範学校のほか、京都では第三高等学校、京都帝国大学、同志社も見学した。

○6月24日 岡村金太郎、来訪する。

海藻についての洋書を矢田部より借りた。

○6月27日 高等官二等に叙せられる〔101〕。

□7月5日 白井光太郎、ドイツ留学へ出発する。

矢田部は7月1日の送別會に参加した。また、同2日に改めて白井が矢田部を訪ねている。

○7月22日 来日していたコーネル大学総長シャーマン（Jacob Gould Schurman, 1854-1942）の歓迎會に出席する。

○8月7日 鎌倉海岸で遊泳中に溺死。

夏期休暇中の事故であった。その時の詳細な様子は、『時事新報』に載るほか〔102〕; 103〕、神田乃武より聞いた話として外山正一が自身の日記に書き残す〔100〕。

○8月8日 一級俸を下賜される。従四位に叙せられ、特旨により位一級進む。

履歴書などに見える正式な死亡の日付はこの日である。

○8月10日 葬儀。

墓所は谷中。墓石正面には「理学博士矢田部良吉之墓」と刻まれ、その原型紙〔IX-13〕が伝わる。葬儀に当たっては、次の人々・組織から弔辭が寄せられた〔IX-1~12〕。

三好学／乾環（東京植物学会会長（松村任三）代理）／小山作之助（東京音楽学校教授）／学士会／後藤牧太（高等師範学校職員）／河野三吉（高等師範附属中学校総代）／多田豊蔵（高等師範学校英語専修科生徒一同代）／石野又吉（高等師範生徒総代）／上真行／東京盲啞学校同窓會／女子高等師範学校職員／山川一賀（報效義會長代理）。

直前に留学へ出発していた白井光太郎は、滞在先で矢田部の訃報に接して詠歌を残している〔104〕313〕。このほか、岡村金太郎によるヤタバゲサ *Yatabella hirsuta* など、矢田部への献名がある。

○9月24日 高等師範学校において追悼会が開かれる。

矢田部の後任として高等師範学校長に就任した伊沢修二が会長を務め、外山正一、大鳥圭介らが演説を行った [4]; 10]。

○12月 旧友・関係者らが発起人となり、記念事業「矢田部博士奨学金」を『東洋学芸雑誌』上に発表する [105]。

記念金を募って東大および高等師範学校に寄付しようという趣旨で、東大ではそれを植物学関係の図書購入費に充てた [23] 134]。高等師範学校での使途は未詳。

1900年(明治33) 没1年

○12月 遺著『日本植物編』(大日本図書)、刊行。松村任三が矢田部の略伝 [14] を寄せる。

1903年(明治36) 没4年

○8月 齋田功太郎、矢田部の墓誌を記す。

原文はすでに紹介があるが [2] 101-2; 106) 667-8]、改めて墓石を確認した上で、その読み下し文を次に掲げる。

嗚呼是れ理学博士矢田部先生の墓なり。先生諱は良吉、氏は矢田部。父郷雲は早没す。母は原川氏。伊豆韮山に生まる。幼より穎悟にして識見卓越し、蚤(つと)に宇内の大勢を察す。英語を横浜語学所に学び、年十八にして開成所教授と為る。既にして米國に遊学すること数年、最も植物及び数学に尽力す。業成りて帰し、大学教授、博物館長、盲啞学校長、高等女学校長、音楽学校主事、高等師範学校長等を歴任し、従四位、勲五等、高等官二等に叙せらる。明治三十二年八月八日卒す。享年四十有九。次男俊二、家を嗣ぐ。先生嘗て植物を戸隠山に探索し、一奇草を得。其の実、正に熟するをもて採り、之を大学植物園に播く。培養に太(はなは)だ力(つと)め、翌年乃ち花さく。先生其の花と其の実とを解剖し、以て其の性質を研究す。諸(これ)を露國植物学士馬氏に贈れば、馬氏、以て未曾有の新種と為し、命名するに先生の氏を以てせんと云う。蓋し先生の靱(はじ)めて此の草を発見するは顕らかなり。著す所に植物通解、日本植物編等有り、世に行わる。又英文を以て日本植物図解若干巻を著し、海外の

学者大いに之を称揚す。其の生徒を教うること深切懇到にして、之を視ること猶お子のごとし。各をして材に随い器を成さしむ。生徒も亦之を敬愛すること猶お父のごとし。本邦古来本草学有り。然れども泰西の法に依り植物学を講ずるは実に先生より始む。今日の植物学の興隆、英語教授法の改善、音楽学校の整備、先生与りて大いに力有り。功太郎、先生に教えを受くること年有り。以て今日の栄を致し、而して遂に万に一も報いること能わず。哀しいかな。

銘に曰う。

国家の盛衰は 学と徳とに關る
嗚呼先生 学深く徳徳(おお)し
就中植物 其の奥域を窮む
以て教え以て育み 我國を開明したり
倅いなるかな厥の功 石と与に蝕さず
明治三十六年八月
従六位理学博士齋田功太郎撰
富岡升堂書
吉川黄雲刻

齋田によるこの墓誌は、トガクシソウの命名をめぐる矢田部と伊藤篤太郎の対立が、周囲に極めて深刻に受けとめられていたことを物語る。

おわりに

以上が、矢田部良吉の生涯にわたる活動、およびその変遷の概要である。植物学に限らない仕事の幅広さと併せて、その活動の内容が、時々で大きく、やや極端に感じられるほどに転換していることもまた了解されたであろう。これは、妻・順が「非常に凝り性の性格で事を始めると徹底的にする習性がありました」[79]と述懐するような矢田部個人の人格的資質と、彼にそのような色々の役割を要請した時代の潮流というものが交差した結果であると理解したい。

浮き彫りになった不明点も多い。例えば、コーネル大学へ提出した海藻に関する卒業論文を、具体的に誰のどのような指導の下で書いたのか。そこにウッズホールのサマースクールで得た経験は関わってくるのか。また、卒業時点で海藻を専門としていたのに、後年なぜシダのモノグラフを書こうとしていたのか。留学中に熱心に進化論を学んだと伝えられるが、では帰国後、進化論の移入

に矢田部が果たした役割はどのようなものか。そもそもなせ、コーネル大学を選び、そこで植物学を専攻しようと思ったのか。

加えて、東大非職の原因に菊池大麓・箕作佳吉兄弟との確執が指摘されている点も、同じ年に矢田部と交流の深かった伊沢修二が東京音楽学校長を非職となっていることなどを考えれば、当時の教育界全体、もしくは社会状況にまで配慮したより大きな文脈から、その意味を検証する試みがあってよいように思われる。同様のことは、植物学研究における牧野富太郎や伊藤篤太郎との齟齬についても言えるであろう。

本研究では、矢田部資料に含まれる個々の史料、とりわけノート類や草稿類の内容を詳しく分析することや、矢田部の植物学上の業績を著書・論文等に基づき評価することは行っていない。東京大学、教育博物館、東京盲啞学校、東京高等女学校、高等師範学校、同附属音楽学校それぞれにおいて矢田部が果たした具体的な役割、担当した講義の内容などについても、今後十分な調査と検討が望まれよう。本稿が、その種の歴史研究を誘発するきっかけとなることを期待したい。

参考文献

- 1) 上野益三, 1988年. 「矢田部良吉」. 木原均 [監修] 『近代日本生物学者小伝』東京 平河出版社 567頁. 86-93頁.
- 2) 昭和女子大学近代文学研究室, 1956年. 「矢田部良吉」. 『近代文学研究叢書 第4巻』東京 昭和女子大学光葉会 423頁. 63-103頁.
- 3) 中川徹 [他], 1978年. 「矢田部良吉資料について」. 科学史研究 (第II期), 17: 114-119頁.
- 4) 大鳥圭介, 1909年. 「矢田部博士の少年時代」. 英語青年, 22(10): 232-233頁.
- 5) 小島憲之, 1909年. 「開成学校教授以来の矢田部博士」. 英語青年, 22(10): 233頁.
- 6) *The Cornell University register*. [1] 国立国会図書館所蔵, [資料貼付ID] 74Y65382.
- 7) *The Cornell University register*. [2] 国立国会図書館所蔵, [資料貼付ID] 1201201563902.
- 8) 森有礼, 1972年. 「渡米日記」. 大久保利謙 [編] 『森有礼全集』東京 宣文堂書店 3冊. 第2巻, 34-42頁.
- 9) 高橋是清, 1929-30年. 『是清翁一代記』大阪 朝日新聞社 上下巻.
- 10) 外山正一, 1909年. 「故矢田部博士追悼会に於ける演説」. 『山存稿』東京 丸善 2冊. 後編, 530-560頁.
- 11) 神田乃武, 1909年. 「矢田部博士を懐ふ」. 英語青年, 22(10): 234-235頁.
- 12) 犬塚孝明・石黒敬章, 2006年. 『明治の若き群像』東京 平凡社 286頁.
- 13) Poole, Murray Edward. 1916. *A Story Historical of Cornell University, with biographies of distinguished Cornellians*. Ithaca, N.Y.: The Cayuga press.
- 14) 松村任三, 1900年. 「故理学博士矢田部良吉君ノ略伝」. 植物学雑誌, 14(155): 1-4頁.
- 15) 田中紫枝・鈴木善次, 1988年. 「矢田部良吉における植物生理学の受容: 明治初期の生理学移植の事例」. 大阪教育大学紀要 III. 自然科学, 37(1): 21-27頁.
- 16) Yatabe, Riokichi[sic], 1876. *The general character of the marine algae of New England*. Thesis, Cornell University. Cornell University Library所蔵, [Call number] Thesis 1876 67.
- 17) 中川徹, 1996年. 「矢田部良吉の英文手稿: A Survey of the Modern Progress in Knowledge」. 横浜商大論集, 30: 252-262頁.
- 18) 宮部金吾博士記念出版刊行会 [編], 1953年. 『宮部金吾』東京 宮部金吾博士記念出版刊行会 2, 6, 365頁.
- 19) Davenport, George E. 1895. Daniel Cady Eaton. *Botanical Gazette*, 20(8): 366-369.
- 20) Atkinson, Geo. F. 1896. Albert Nelson Prentiss. *Botanical Gazette*, 21(5): 283-289.
- 21) Eaton, Daniel C. 1873. List of Marine Algae collected near Eastport, Maine, in August and September, 1873 [...]. *Transactions of the Connecticut Academy of Arts and Sciences*, 2(2): 343-350.
- 22) 宮部金吾, 1936年. 「序」. 岡村金太郎『日本海藻誌』東京 内田老鶴圃 979頁. 1-5頁.
- 23) 小倉謙 [編], 1940年. 『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』東京 東京帝国大学理学部植物学教室 342頁.
- 24) 磯野直秀, 1987年. 『モースその日その日』横浜 有隣堂 360頁.
- 25) 長久保片雲, 1997年. 『世界的植物学者 松村任三の生涯』東京 暁印書館 237頁.
- 26) 『東京大学法理文学部第五年報 [明治9年9月~10年8月]』.
- 27) 宿南保, 1992年. 『浜尾新: 明治期郷土出身文教の偉人群』豊岡 吉田学院 232頁.
- 28) 岡村金太郎, 1922年. 「青長屋: 本邦生物学側面史」. 科学知識, 2: 591-594, 687-691, 792-795頁.
- 29) 渡辺正雄, 1996年. 『お雇い米国人科学教師 (増訂版)』東京 北泉社 535頁.
- 30) 国立科学博物館, 1977年. 『国立科学博物館百年史』東京 国立科学博物館 898頁.

- 31) 武内博 [編著], 1995年. 『来日西洋人名事典 (増補改訂普及版)』東京 日外アソシエーツ 700頁.
- 32) クララ・ホイットニー [著], 一又民子 [他] [訳], 1996年. 『勝海舟の嫁クララの明治日記』東京 中央公論社 上下巻.
- 33) 北山太樹, 2014年. 「江の島産海藻採集者 (1877-2014)」。海洋と生物, 36(6): 628-629頁.
- 34) Burt Green Wilder papers, #14-26-95. Division of Rare and Manuscript Collections, Cornell University Library.
- 35) 土井康弘, 2005年. 『伊藤圭介の研究: 日本初の理学博士』東京 皓星社 472頁.
- 36) 松村任三, 1926年. 「江ノ島滞在中のモールス博士」。人類学雑誌, 41: 54-56頁.
- 37) 『東京大学法理文三学部第六年報 [明治10年9月~11年8月]』.
- 38) 大植四郎, 1971年. 『明治過去帳』東京 東京美術 1,264頁 (原著私家版 1935年).
- 39) 『東京大学法理文三学部第七年報 [明治11年9月~12年8月]』.
- 40) 「東京動物学会古記録」。動物学雑誌, 23-27 (1911-1915) に連載.
- 41) 『東京大学法理文三学部第八年報 [明治12年9月~13年8月]』.
- 42) 竹中梨紗, 2010年. 「明治期日本人植物学者と C. J. マクシモーヴィチ」。小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会 [編] 『小野蘭山』東京 八坂書房 578, 58頁. 401-425頁.
- 43) 『東京大学第一年報 [明治13年9月~14年12月]』.
- 44) 大場秀章・秋山忍, 1996年. 「東京大学植物標本室に関係した人々」。大場秀章 [編] 『日本植物研究の歴史: 小石川植物園300年の歩み』東京 東京大学総合研究博物館 187頁. 84-115頁.
- 45) 「明治十四年小石川植物園日誌」。大場秀章 [編] 『日本植物研究の歴史: 小石川植物園300年の歩み』東京 東京大学総合研究博物館 187頁. 163-180頁.
- 46) 東京大学百年史編集委員会, 1984年. 東京大学百年史編集委員会 [編] 『東京大学百年史 通史1』東京 東京大学出版会 1,094頁.
- 47) 『東京大学第二年報 [明治14年9月~15年12月]』.
- 48) 中野治房, 1932年. 「東京植物学会五十年間ノ事務業務ニ就テ」。植物学雑誌, 46(544): 266-273頁.
- 49) 玉木存, 1998年. 『箕作佳吉とその時代』東京 三一書房 415頁.
- 50) 昭和女子大学近代文学研究室, 1956年. 「外山正一」。『近代文学研究叢書 第4巻』東京 昭和女子大学光葉会 423頁. 197-242頁.
- 51) 井上哲次郎, 1938年. 「懐舊談」。学燈, 42(1): 2-7頁.
- 52) 太政官, 明治15年4月. 「東京大学教授矢田部良吉湯治并帰京ノ件其二」。国立公文書館所蔵, [請求番号] 公03429100 [件名番号] 065.
- 53) 磯野直秀, 1986年. 「矢田部良吉宛の福沢書簡と E・S・モース」。福沢手帖, 48: 7-11頁.
- 54) 太政官, 明治15年8月. 「大学教授矢田部良吉帰京ノ件」。国立公文書館所蔵, [請求番号] 公03436100 [件名番号] 085.
- 55) 『東京大学第三年報 [明治15年9月~16年12月]』.
- 56) Sakasegawa, S. 2005. The Life of Isaac Bunting: The Victorian Colchester Nurseryman Who 'Discovered' the Erabu Lily. *Research Bulletin of the Faculty of Humanities, Shigakukan University*, 26(1): 127-150.
- 57) 『東京大学法理文三学部一覽 従明治十六年至明治十七年』.
- 58) 太政官, 明治16年12月. 「東京大学教授矢田部良吉熱海へ湯治ノ件」国立公文書館所蔵, [請求番号] 公03661100 [件名番号] 083.
- 59) 太政官, 明治17年1月. 「東京大学教授矢田部良吉帰京ノ件」。国立公文書館所蔵, [請求番号] 公03878100 [件名番号] 065.
- 60) 岩津都希雄, 2016年. 『伊藤篤太郎: 初めて植物に学名を与えた日本人 (改訂増補版)』東京 八坂書房 348頁.
- 61) 中井猛之進, 1915年. 「理学博士松村任三氏植物学上ノ事績ノ概略」。植物学雑誌, 29(346): 342-356頁.
- 62) Yatabe, R. 1891. New or Little Known Plants of Japan, No. 10. 植物学雑誌, 5(55): 281-284頁.
- 63) 太政官, 明治17年9月. 「東京大学教授矢田部良吉外一名御用ニ付神奈川県下へ出發并帰京ノ件其二」。国立公文書館所蔵, [請求番号] 公03890100 [件名番号] 082.
- 64) 齋田先生記念誌編纂代表 [編], 1929年. 『齋田功太郎先生』東京 山崎与吉 16, 110, 41頁.
- 65) Maximowicz, C. J. 1886. Diagnoses plantarum novarum asiaticarum. VI. Insunt stirpes quaedam nuper in Japonia detectae. *Mélanges biologiques tirés du Bulletin de l'Académie impériale des sciences de St. Pétersbourg*, 12: 415-418.
- 66) 伊藤篤太郎, 1883年. 『明治十六年 伊藤篤太郎ヨリ露国マクシモヴキッチ氏へ所贈腊葉図』。国立国会図書館所蔵, [請求記号] 特7-264.
- 67) Itō, T. 1887. Berberidearum Japoniae Conspectus. *Journal of the Linnean Society. Botany*, 22: 422-437.
- 68) 東京女子高等師範学校 [編], 1915年. 『東京女子高等師範学校沿革略志』東京 東京女子高等師範学校 120頁.
- 69) 中野実, 1995年. 「帝国大学成立に関する一考察: 帝国大学理科大学教授矢田部良吉関係文書の分析

- を通して」。東京大学史紀要, 13: 55-67頁。[のうち, 『近代日本大学制度の成立』(吉川弘文館, 2003年)に収録。]
- 70) 三好 学, 1932年。「回顧雑談」。植物学雑誌, 46(544): 264-265頁。
- 71) 稲葉彦六, 1914年。「教育家としての齋田先生」。東京高等師範学校博物学会会報, 18: 2-5頁。
- 72) 東京芸術大学百年史編輯委員会[編], 1987年。『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第1巻』東京 音楽之友社 578, 78頁。
- 73) 筑波大学附属聾学校同窓会120年史編集委員会[編], 2011年。『筑波大学附属聾学校同窓会史』市川 筑波大学附属聾学校同窓会 197頁。
- 74) 東京女学館百年史編輯室[編], 1991年。『東京女学館百年史』東京 東京女学館 792, 96頁。
- 75) 藤本寛子, 2006年。「明治20年代の東京音楽学校と日本音楽会」。お茶の水音楽論集, 8: 11-23頁。
- 76) 無署名, 1887年。「雑録」。植物学雑誌, 1(6): 129-131頁。
- 77) 大橋広好, 1978年。「日本植物分類学の初期とその研究資料」。UP, 72: 6-11頁。
- 78) 柳田国男, 1971年。『定本 柳田國男集 別巻第五』(新装版)東京 筑摩書房 663頁。
- 79) 矢田部シユン(順), 1950年。「夫の性格の一面」。学苑, 12(4): 10頁。
- 80) Ito, T. 1888. *Ranzania*: A new genus of Berberidaceae. *Journal of Botany, British and Foreign*, 26: 302-303.
- 81) 牧野富太郎, 1940年。「戸隠升麻のイキサツ」(『園芸植物瑣談(其十三)』所収)。実地園芸, 26(1): 9-14頁。
- 82) [西野文太郎], 1972年。「斬奸状」。大久保利謙[編]『森有礼全集』東京 宣文堂書店 3冊. 第2巻, 279-281頁。
- 83) 屋木瑞穂, 1997年。「『女学雑誌』を視座とした明治二二年の文学論争」。近代文学試論, 35: 1-15頁。
- 84) 無署名, 1889年。「矢田部良吉氏の改進黨新聞に対する訴訟事件」。『教育持論』159号(9月15日)。
- 85) 磯野直秀, 1988年。「進化論の日本への導入」。『モースと日本: 共同研究』東京 小学館 518頁。295-327頁。
- 86) 三好 学, 1891年。「新称日本地衣」。植物学雑誌, 5(52): 197-200頁。
- 87) 内閣, 明治23年7月5日。「文部省稟議理科大学教授兼東京盲啞学校校長矢田部良吉兼官罷免ニ付臨時賞与ノ件ハ詮議ニ及ヒ難キ旨ヲ令ス」。国立公文書館所蔵, [請求番号]類00461100 [件名番号]031。
- 88) 無署名, 1890年。雑録「植物学ニ関スル講談」。植物学雑誌, 4(43): 344-351頁。
- 89) 蔵田愛子, 2015年。「小石川植物園の画工・波部敏太郎の足跡: 明治二十年代の植物学と図版制作」。近代画説, 24: 98-115頁。
- 90) 中條長昭・菊山功嗣, 2011年。「我が国近代学術黎明期の埋もれた菌類学者田中長嶺の研究」。環境経営研究所年報, 10: 71-77頁。
- 91) 秋月俊幸, 2010年。『書簡集からみた宮部金吾』札幌 北海道大学出版会 310頁。
- 92) 松田清, 2013年。「解説 山本読書室資料について」。松田清[編]『山本読書室資料仮目録』京都 京都外国語大学国際言語平和研究所 495頁。5-18頁。
- 93) 生徒委員, 1937年。「父堀誠太郎のこと: 東大教授中井猛之進博士訪問記」一高同窓会会報, 32: 71-78頁。
- 94) Asa Gray correspondence files of the Gray Herbarium, 1838-1892 (inclusive). Correspondents General Ya-Zu. Botany Libraries, Archives of the Gray Herbarium, Harvard University Herbaria, Cambridge, Mass.
- 95) 岡倉山三郎, 1909年。「東京高師に関係されし以来の矢田部博士」。英語青年, 22(10): 233-234頁。
- 96) 平田喜一, 1909年。「矢田部先生を思ふ」。英語青年, 22(10): 235頁。
- 97) 脇豊蔵, 1909年。「故矢田部先生に学びし事」。英語青年, 22(10): 235-236頁。
- 98) 長井氏最, 1909年。「故矢田部先生」。英語青年, 22(10): 236-237頁。
- 99) 石川祐助, 1909年。「故矢田部博士を憶ふ」。英語青年, 22(10): 237頁。
- 100) 柳生四郎, 1976-8年。「外山正一の日記(一)~(二十一) および解説」。UP, 50~73に断続的に連載。
- 101) 内閣, 明治32年6月27日。「高等師範学校長理学博士矢田部良吉外一名陸叙ノ件」, 国立公文書館所蔵, [請求番号]任B00212100 [件名番号]013。
- 102) 「矢田部博士の死」。『時事新報』明治32年8月9日。
- 103) 「矢田部氏溺死後聞」。『時事新報』明治32年8月10日。
- 104) 木村陽二郎, 1990年。「白井光太郎伝」『白井光太郎著作集 第6巻』東京 科学書院 355頁。281-342頁。
- 105) 無署名, 1899年。「故矢田部博士奨学金(雑報)」。東洋学芸雑誌, 220: 40頁。
- 106) 上野益三, 1986年。『日本博物学史(補訂版)』東京 平凡社 680, 73頁。